ISSN 0914-6962

宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 6

1987

宮島町立宮島歴史民俗資料館
MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

目　次

○はじめに…… 1

○厳島を訪れた人たち……佃　雅文…… 2

○資料館の活動…… 13

1．入館者数…… 13

2．年度別予算一覧…… 15

3．資料収集…… 16

4．調査・研究等…… 19

5．展示普及等…… 19

6．歴史民俗資料館協議会…… 21

7．購入図書・受贈交換図書…… 22

○町史のあゆみ…… 28

○宮島町立宮島歴史民俗資料館

泉盛夫氏寄託能楽関係文書目録……山中玲子…… 35

○資料紹介――「道中日記覚帳」……高橋修三…… 46

はじめに

このたび「宮島の歴史と民俗」No.6を刊行いたしました。

宮島歴史民俗資料館は昭和49年、町史編さん室は55年に開設され、それぞれ13年、6年を経過いたしました。この間、資料の調査・収集・整理・普及活動を進めるにあたりましては、多くの方々のご理解とご協力をいただくことができました。お陰様をもちまして、文化活動や学習の場として一定の評価を得るようになりました。ここに改めてお礼を申し上げます。

宮島には豊かな自然や数多くの文化財が遺されております。これらを継承していくためには、そこに含まれている意味や価値を歴史的な深み、社会的な広がりのなかで問いなおし追及していく必要があります。また、町民をはじめ広範な人々の積極的な参加を求めなければなりません。

私どもは以上のような観点にたち、そのことに多少なりとも寄与できるように日々の活動を進めております。どのような資料を収集すべきか、保存や展示・普及はどうあるべきか、そのために必要な施設は何か、など多方面にわたり、日常の業務を通して検討してまいりました。その結果、それぞれの課題も明確になりました。

ここに掲載した成果は、こうした活動の基礎となる調査研究の過程で生み出されたものです。保存・展示普及などのいずれをとっても、調査研究によらずして、よく為しうるものではありません。数少ない職員のため、充分とはいえませんが、これらを通して、課題の解決に向け精進を重ねてまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

なお、最後になりましたが、法政大学山中玲子先生には、ご多忙の中、能楽資料の調査整理にあたってご指導をいただき、更には貴重な稿を寄せていただきました。誌上を借りて厚くお礼を申し上げます。

厳島を訪れた人たち

宮島町史編さん室
佃　雅文

はじめに

毎年200万から250万もの人々を迎える宮島。春や秋の行楽シーズンには、〇〇様ご一行と書かれた小旗を先頭とする団体や修学旅行の小・中・高の生徒たち、また数人の職場や近所のグループ、男女の二人連れ、きままなひとり旅などさまざまな人達が浅橋前の広場を行き交うことになる。

ところで、宮島観光協会のミニ情報には宮島で宿泊した修学旅行生を県別に集計している。因に昭和62年11月16日から30日までの間でみると21都道府県に及んでいる（「観光ミニ情報」115号）。

修学旅行の数字しかも宿泊した場合でもこれだけの地域から宮島を訪れている。これは秋のシーズンの最後の時期であるので年間を通してみると、もっと多くの道府県から宮島に訪れていることになるだろう。また日本にかぎらず、中国、台湾、フィリッピンなどのアジア地域、ヨーロッパやアメリカなどの国々から訪れた人たちを見かける機会も多くなってきたといえる。

こうした人たちが、何を求めて宮島に来られ、宮島ではどこを歩き、何を見て、満足しあるいは、想いをのこし宮島をあとにするのだろうか。

宮島の場合、幸いにして古代中世から訪れた人たちの記録が日記や紀行文などの文学作品に残されている。いまだ充分に収集作業をすすめているわけではないが、故福田直記氏が生前広く集められた宮島関係の文学資料をおあずかりすることになった。氏の資料の整理をすすめる過程で、それぞれの旅の形態、宮島を訪れた契機、宮島での行動などについて区分してみることにより各時代の宮島像に迫れるのではと思い至った次第である。

あくまで、宮島に関する紀行文や来島の記録などからどういう問題が提起されるかというこころみにすぎないことを前提としている。

なお、ここでは資料の制約もあるのでとくに時代を17世紀から19世紀、明治維新の前までに限った。

1．厳島への旅

(1)　来島の時期

ここでとりあげる文献を訪れた時代順に並べたのが表1である。

数少ない資料から時代的な変遷を論議することはできないが、18世紀の後半から19世紀前半、宝暦から明和・天明から文化・天保の頃に多くみられる。また1850年から60年代の幕末期にも多くなっている。

1700年以降については、厳島を紹介した貝原益軒の『厳島勝景図并記事』や小嶋常也の『厳島道芝記』の出版もみられるので、厳島への来島に影響を与えたことであろう。またこうした紀行文の

うち出版されたものも多く、それらが一層厳島への旅をうながしたことが予想される。

来島の月をみると、6月が最も多い。これは旅の目的にも関連してくるが、旧暦6月17日の祭礼（管絃祭）の前後に集中しているためと考えられる。しかもこの傾向は、1680年から1770年代に特にみられる。この時期には、6月以前の来島例がまったくみられない（表2）。

1780年代から1810年代までは、6月以前の来島例がほとんどである。1820年代から1860年代までは、1・4・7の各月を除いて来島例が平均化してくる。

速断することはできないが、1770年代までは、厳島への来島契機が6月の市立て、祭礼であり、それが時代を経るに薄れてきた傾向にあるといえるのではないか。

このことは、6月市立て・祭礼のほかに人々を厳島に誘う何らかの契機が生じた結果とも考えられる。

また、こうした旅を考えるうえで、当時の交通とくに船の問題が重要であるが、本稿ではそこまで立ち入らないこととする。

(2) 地域的広がり

生れた国、育った土地、またそれぞれの精神的社会的生活の違いが、それぞれの厳島観に反映しているはずである。

それらを読み取ることは甚だ困難な作業かもしれない。そのための手順として来島者の生れた国を厳島からの距離によって配置してみた（表3）。ただし当時の交通手段や里程によったものでもなく、また2の大淀三千風や29の川路聖謨のように生れた国は伊勢・豊後であるが旅立ちの地は仙台・江戸という場合も含まれている。

1800年代までは、伊予・備前・備中・備後という安芸国の隣国からの来島が多いようにみえる。最も遠いのは常陸国である。これは、地元の漂流者を長崎まで迎えにゆく旅に同行した長久保赤水の場合である。

1810年代からは、周辺の伊予に加えて周防・長門といった例がみえる。さらに九州からの来島もみられる。東に目をうつすと越中・越後そして出羽から来ている。

数が少ない上、紀行文という性格からそれぞれの国で厳島がどのように認識されていたかを述べることは困難であろう。

しかし、街道の整備や航路の発達により旅をする人が増え、さらには『道芝記』や『名所記』などの出版、頒布によりしだいに遠国からの来島者がみられるようになったといえるだろう。

(3) それぞれの職業

この時代、職業という区分が適切とも思えないが、便宜的に扱うこととする（表4）。

1780年代までは、俳人がそのほとんどをしめている。

1800年代以降になると、商人や学者や武士、志士など様々となる。

(4) 旅の目的

それでは、厳島を訪れる契機となったそれぞれの旅の目的をみてみよう。すでに旅については宮本常一氏の多くの研究や今野信雄氏の『江戸の旅』などがあり、信仰の旅、大名行列の旅、自由の旅などその目的や形態の分類がなされている。ここでは、あくまでそれぞれの序あるいは本文に書

かれているものに依拠することにした（表５）。

1770年代までは、厳島参詣を旅の目的とするものが多く、それ以降にはほかの目的の途上に厳島に立ち寄るという場合がみられる。

以上残された紀行文などから、厳島への旅についてみると、

①1780年代までは旧暦６月の祭礼、市立ての時期に来島が集中している。しかしそれ以降になると、ほぼ平均化している。

②1800年代までは、厳島周辺の地域の出身者の来島がほとんどだが、しだいに遠くからの来島がみられる。

③あえていえば、1770年代までは、俳人が旧暦６月の祭礼、市立ての時期に訪れ、それを紀行文に著わし、それ以後の来島を促す契機となったのでは。

と考えられる。

これはあくまで資料の傾向であり、厳島への来島の一般的な傾向を示すには、もっと違った観点からの検討が必要であることは言うまでもない。

２．厳島での行動

つぎに彼らが厳島でどのように時間を過ごしたかについてみてみよう（表６）。

(1)　滞在日数と宿

厳島での滞在日数は、それぞれ旅の目的により一律にその長短を論ずることはできない。

最も長いのは、石風呂入湯を目的とした２週間である。短いのは長崎へ向かう途中に立ち寄った川路聖謨である。

到着した日と出発した日を含めて３日というのが多い。

宿になると記述も少なくなる。また船に泊まる例もみられる。また知人を頼る例もみられるが、宿として名前が出てくるのが1780年代後半からである。

それ以前では、多聞坊・大聖院・宝寿院などの寺の名があがってくる。1810年代以降になると船宿・浪華講という語がでてくるようだ。

厳島を象徴するもののひとつとして大鳥居は欠くことのできない建造物である。そこで大鳥居の建立・倒壊の時期（岡田貞次郎『宮島の古建築』昭和54年）と来島の時期とを重ねてみた。すると14例ほど大鳥居が倒壊あるいは痛んでいる時期に来島していることになる。

しかし大鳥居が壊れた状態にあることをその文に記した例は1788年の菅茶山と春木南湖、1855年の清河八郎、1865年の桃節山の４例である。

(2)　弥山めぐり

16例ほど弥山めぐりがみられる。弥山の諸社諸堂めぐりには案内者を頼むのが通例であったようだ。1814年（文化11）に訪れた野田泉光院は、「二王門から上には所々霊場があるが案内の者がいなくては登れない」と引き返している。

(3)　島めぐり

島めぐりについて述べているものが７例ある。

似雲の『としなみ草』によれば、「島めぐり」と「浦まわり」の二つがある。

「島めぐり」とは、神事として執り行われる儀式で潔斎など細かな取り決めがある。一方「浦まわり」は、単に浦々を船でまわり山水を見るものであったという。

(4) 石風呂

『厳島道芝記』（元禄15年刊）には、厳島の石風呂が紹介されているが、ここでみる限りそのことに言及しているのは『西遊雑記』が最初である。『西遊雑記』では「竈風呂」として図が描かれている。

この石風呂の入湯記録として貴重なのが1839年（天保10）の「厳島拝見雑記」（井上氏所蔵）である。２週間にわたり厳島に滞在し、石風呂入湯をくりかえしている。

1811年（文化８）の『辛未紀行』にも石風呂のことが述べられ、入湯の人で賑っていたことがわかる。

こうしてみると、厳島での行動をみると、旅の目的によるちがいや時間の制約などを考慮に入れなければならないが、神社参拝、弥山諸堂めぐり、島まわりという３つが大きな柱になっている。そしていまでは絶えたようだが厳島の石風呂入湯が来島の契機のひとつであったといえるのではないだろうか。

おわりにかえて

紀行文や記録にとどめられたものだけから厳島への来島の契機はなにかという個々の内面の意識を探ろうという試みであったが、充分にその方向性を見出せたとはいえない。かえって混沌の世界へ迷いこんだのではと反省ばかりである。

厳島での行動ではもう少し資料に記述された建物や内容などその時代的なちがいについて検討してみる必要を感じている。

また、来島者が記録にとどめる際に何かの書き物を参考にしたようにも伺えるので一体それが何で、どのようなものが使われていたのかなど考えてみたい問題である。

最後に資料の収集にあたり多くの方々の御教示をいただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

（参考） 地域別に見た修学旅行の宿泊状況

青森	3	東京	4	静岡	1	三重	2	福岡	1
宮城	1	茨城	1	長野	4	和歌山	1		
山形	1	栃木	2	岐阜	2	岡山	2		
埼玉	4	神奈川	1	大阪	4	愛媛	1		
千葉	4	愛知	3	奈良	1	熊本	2		

表1　厳島を訪れた人たち（来島の時期）

	著　者	資　料	出　　典	来島の時期		生国	旅の目的
1	岡西惟中	あまの子すさび	『続々群書類従』	1683・7/3～5	談林派俳人	因幡	中国・四国遊歴
2	大淀三千風	日本行脚文集	『日本紀行文集成』	1684・6/5～8	談林派俳人	伊勢	諸国行脚
3	坂上羨鳥	花橘	故福田氏メモ	1713・6/上	俳人	伊予	厳島参詣
4	似　　雲	年並草	『としなみ草』	①1725.6/17 ②1725・7/25～28	僧・歌人	安芸	諸国遊歴行脚
5	他阿上人	遊行日鑑	『遊行日鑑』	1731・9/18～19	僧		厳島参詣(公式)
6	猶　　貫	紀行つゝはたち	国立国会図書館	1755・6/17頃	俳人	大坂	讃芸霊場巡礼
7	山中時風	時風厳島紀行	故福田氏メモ	1761・6/17頃	俳人	伊予	厳島参詣
8	如　　扇	花扇子	『山辺町史』	1762・7/11～12	俳人	紀伊	霊場巡拝
9	長久保赤水	長崎行役日記	『日本紀行文集成』	1767・11/6	地理学者	常陸	長崎へ公用
10	海　　宇	海宇厳島紀行	松山市立子規記念博物館	1776・6/4	俳人	伊予	厳島参詣
11	可　　菊	可菊厳島紀行	松山市立子規記念博物館	1782・6/?～22	俳人	伊予	厳島参詣
12	古河古松軒	西遊雑記	『日本庶民生活資料集成』	1783・4/16～19	薬種業・医師	備中	西国遊歴
13	菅　茶　山	遊芸日記	『広島県史近世資料編』	1788・6/17～19	儒学者	備後	文人訪問
14	春木南湖	西遊日簿	『西遊日簿』	1788・9/17	南画家	江戸	長崎遊学
15	司馬江漢	江漢西遊日記	『日本庶民生活資料集成』	1788・9/17～18	画家	江戸	長崎遊学（洋画）
16	武元君立	厳島紀行	『厳島紀行』	1798・5/24～25	儒学者	備前	岩国広島厳島探勝
17	菱屋平七	筑紫紀行	『日本庶民生活資料集成』	1802・4/9～11	商人	尾張	名所旧跡神社仏閣
18	熊谷直好	帰国日記 厳島日記	『日本歌学全書』	？・6/11 1811・5/15～22	国学者・歌人	周防	大坂から帰国 厳島参詣
19		辛未紀行	山口県文書館	1811・3/4～9			周防安芸の調査
20	野田泉光院	日本九峰修行日記	『日本庶民生活資料集成』	1814・3/6～7	修験僧	日向	諸国霊跡巡拝
21	高木善助	薩陽往返記事	『日本庶民生活資料集成』	1829・10/28	商人	大坂	薩摩行き
22	近藤平格	芸陽遊学日記	『広島県史近世資料編』	1830・3/3～4	心学者	伊予	道話・修行
23	内藤市右衛門	厳島吉田紀行	福田道憲氏所蔵	1830・3/16～20		周防	大島郡代官の厳島吉田参詣
24	東　　林	泛登無隠	大西紀夫氏所蔵	1830・12/13～14		越中	本山の御使僧
25	松岡行義	後松日記	故福田直記氏所蔵	1834・10/10	国学者	筑後	
26	西田直養	筱舎漫筆厳島参詣記	日本随筆大成	1835・8/20	小倉藩士	豊前	外国交渉
27	井　　上	厳島拝見雑記	井上就吉氏所蔵	1839・5/16～30	神官	安芸	厳島参詣・石風呂入湯
28	吉田松陰	癸丑遊歴日記	吉田松陰全集	1853・2/3～4	幕末の志士	長門	
29	川路聖謨	長崎日記	東洋文庫	1853・11/27	幕政家	豊後	外国交渉
30	清河八郎	西遊草	東洋文庫	1855・5/19～21	幕末の志士	出羽	伊勢詣で
31	河井継之助	塵壺	『日本庶民生活資料集成』	1859・9/25	藩政家	越後	遊学
32	小田六左衛門	いつくしま日記	山口県文書館	1860・6/26～29	商人	周防	厳島参詣
33	桃　節　山	西遊日記	『日本庶民生活資料集成』	1865・8/2～7	儒学者	出雲	九州への御内用
34	藤井此蔵	藤井此蔵一生記	『日本庶民生活資料集成』	1830・6 1869・6/14		伊予	厳島参詣

表２　時代毎にみた来島の時期

年代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
1680						1	1						2
1710						1							1
1720						1	1						2
1730									1				1
1750						1							1
1760						1	1				1		3
1770						1							1
1780				1		2			2				5
1790					1								1
1800				1									1
1810			2		1	1							4
1820										1			1
1830			2		1	1		1		1		1	7
1850		1			1				1		1		4
1860						2		1					3
計	0	1	4	2	4	12	3	2	4	2	2	1	37

表３　時代毎にみた来島の地域的広がり

年代	南 →					厳島	← 北						
1680							因幡		伊勢				
1710					伊予								
1720						安芸							
1730													
1750									大坂				
1760					伊予				紀伊	常陸			
1770					伊予								
1780					伊予		備後	備中		江戸	江戸		
1790							備前						
1800									尾張				
1810	日向		長門	周防									
1820									大坂				
1830	筑後	豊前		周防	伊予	安芸					越中		
1850		豊後	長門								越後	出羽	
1860				周防	伊予		出雲						

表4　時代毎にみた来島者の職業

年代							
1680	俳人	俳人					
1710	俳人						
1720	僧						
1730	僧						
1750	俳人						
1760	俳人	俳人	学者				
1770	俳人						
1780	俳人	医師	儒者	画家	画家		
1790	儒者						
1800	商人						
1810	国学	僧					
1820	商人						
1830	心学	僧	国学	武士	武士	神官	農民
1850	志士	官僚	志士	家老	商人	儒者	
1860	農民						

表5　時代毎にみた旅の目的

年代	
1680	中国四国遊歴・諸国行脚
1710	厳島参詣（管絃祭）
1720	諸国遊歴行脚（管絃祭）
1730	厳島参詣
1750	讃岐安芸霊場巡礼
1760	厳島参詣・霊場巡拝・長崎へ公用
1770	厳島参詣
1780	厳島参詣・西国遊歴・文人訪問・長崎遊学・長崎遊学
1790	岩国広島厳島探勝
1800	名所旧跡神社仏閣
1810	厳島参詣・周防安芸の調査旅行・諸国霊跡巡拝
1820	薩摩行き
1830	道話修行・厳島吉田参詣・人やりの旅・厳島参詣石風呂入湯
1850	長崎行・伊勢詣で・備中遊学・厳島参詣
1860	九州へ公用

表6　厳島を訪れた人たち（厳島での行動）

		宿	滞在日数	厳島での行動	大鳥居
1	岡西惟中	ものさびしき旅店	3日	①曙着→神社参詣→旅店 ②弥山めぐり→大願寺→廻廊 ③明方乗船→菊間	
2	大淀三千風	多門坊	3日か	①多聞坊→寺社巡礼	
3	坂上羨鳥			①半夜着 ②弥山→島廻り→大元社	正徳6倒壊
4	似雲		1日 3日	①江波→巳下刻着→本地観世音開帳→御両社→大元社→管絃祭→夜半過江波 ①江波→五更杉の浦→有浦→曙経堂下→弥山→船 ②御社参詣→大聖院→西方院 ③浦まわり	
5		大聖院	2日	①水子町→九つ鳥居大雁木→大聖院→本社→客人社→観音堂→宝蔵→大聖院→本社百八燈 ②御島廻り→大元社→大願寺	元文4建立
6	猶貫	宝寿院	不明	鞆→宝寿院→厳島社ほか、管絃祭、→広島	
7	山中時風		1週間くらい	神社→奥の院→管絃祭	
8	如扇		3日	神社→千畳敷、（弁財天・島めぐり・熊野鷹・鹿）	
9	長久保赤水		3日	①杉の浦着 ②杉の浦→神社→弥山→奥の院→杉の浦→暮乗船	
10	海宇		3日くらい	浜の胡着→社参→市中→管絃祭（船にて）	安永4倒壊
11	可菊	いつもや六郎右衛門	8日くらい	①夕方千畳敷着→宿 ②本社・宛人社→弥山→宿 ③管絃祭 ④歌舞伎見物 ⑤光明院→寺めぐり→千畳敷→大元社→大聖院 ⑥紅葉谷 ⑦西蓮町 ⑧夜明け→広島	
12	古河古松軒		5日	御社・廻廊・弥山・絵馬堂・華表・天神社・大元 竈風呂・島めぐり・聖崎	

13	菅　茶　山		3日	①地御前→宮島→管絃祭 ②神社参拝→滝宮崖崩→大鳥居未修理→観劇 ③→草津	享和1建立
14	春木南湖	いよや久兵衛	2日	①暮七つ着→明神礼拝→大鳥居なし→廻廊燈明→宿 ②朝六つ半乗船→玖波	
15	司馬江漢		3日	①井口→宮島→神社参詣 ②滞留 ③四つ乗船→小方	
16	武元君立		2日	①弥山登山→神社→千席（千畳閣） ②乗船→岩国	
17	菱屋平七		3日	①申刻着→宿→神社献燈→船(泊) ②弥山宮めぐり→本社→大聖院→大願寺→千畳敷ほか→宿 ③卯刻出帆	
18	熊谷直好		1日 8日	①午時着→本社→大元社→船→申時発→室の木 ①午時着→本社→宿→本社 ②弥山参詣→広島 ⑥広島→厳島 ⑦明方着→宿 ⑧夜→明蔵大人 ⑨朝乗船→小方	
19	著者不詳	幸町勝屋喜助	6日	①小方→九つ半着→宿 ②御社→荒胡社→東廻廊→社頭→宿→棚守宅 ③宝庫拝見→神前→大願寺→長浜社 ④絵図写し ⑤弥山登山→大元社→石風呂→宿→大聖院→西方院 ⑥→児玉駒之助宅→暮時乗船→廿日市	
20	野田泉光院		2日	①船場穴の口→暮時着 ②神社(弁天)参詣→五重塔→千畳敷→弥仙山→乗船→廿日市	
21	高木善助	船宿能美屋庄五郎	1日	①昼着→船宿→神社参詣→大願寺→宝庫拝見→船宿→百八燈献燈→乗船→城の越し	
22	近藤平格	浜の町能美屋庄五郎	3日	①八つ前着・船中泊 ②→浜の町宿→神社参詣→千畳敷→弥山→千畳敷→五重塔→宿 ③乗船→味名(廿日市)	

23	内藤市右衛門	沖甚右衛門	5日	①通津→昼八つ着西方木場→宿 ②社参（客人社・本社・大元社・本地観音堂）→宿 ③島廻り ④弥山登山→宿→市中見物→神事能 ⑤乗船→江波		
24	東　　林	存光寺町 三吉屋重三郎	2日	①草津→九つ着→神門→廻廊・神殿→千畳敷→（経堂）→宿→廻廊→宿 ②乗船→小方		
25	松岡行義		1日	①御社参詣→客人宮・滝宮・経蔵・湯殿・大元社→棚守宅→宝物拝見→夕方出船		
26	西田直養		1日	①御社（社記）→絵馬→神楽→転法輪堂→千畳敷→五重塔		
27	井　　上	西町大野屋増五郎	15日	①八つ半石風呂沖着 ②→宿→神社（本社・客人社・大元社）参詣→石風呂→神社燈明見物 ③本社・客人社→石風呂 ④本社・客人社→大元社→石風呂→宿→えんま堂→大元幸神社→石風呂→御両社 ⑤御両社→石風呂→御両社→胡社→山王社→滝宮→大聖院→石風呂 ⑥大元社→石風呂→夕涼み（大鳥居周辺） ⑦御両社 ⑧→三笠浜→島廻り→腰細浦（風雨にて中止） ⑨島廻り ⑩石風呂→御両社→石風呂 ⑪棚守屋敷拝見 ⑫御両社 ⑬金比羅社・住吉社・大元社ほか→宝庫拝見 ⑭石風呂 ⑮御両社・大元社→乗船→広島		
28	吉田松陰		2日	神社参詣		嘉永3倒壊
29	川路聖謨		1日	①神社参拝（絵馬・刀剣）→玖波		
30	清河八郎	浪華講	3日	①夕方着→宿（浪華講）→神社参詣→宿 ②弥山登山→宿→船		
31	河井継之助		1日	①草津→五つ頃着→宿→弥山→千畳敷→夜出船		

32	小田六左衛門	南町ひわたや孝蔵 隣社人	4日	①昼過須屋社着→七つ大雁木着→宿→御本社→大元社→宿→芝居見物 ②人形芝居見物 ③市中見物→紅葉谷→宿 ④市中見物・買い物・芝居見物 ⑤五つ乗船→七つ半新湊	
33	桃　節　山	能美屋庄五郎	6日	①江波→四つ前着→船中泊 ②船→夜明け宿→神社参詣→千畳敷→紅葉の茶屋→宿 ③船出ず・市中見物 ④楓茶屋→宿→船中泊 ⑤船→宿→船中泊 ⑥昼出船→田の浦へ	
34	藤井此蔵				

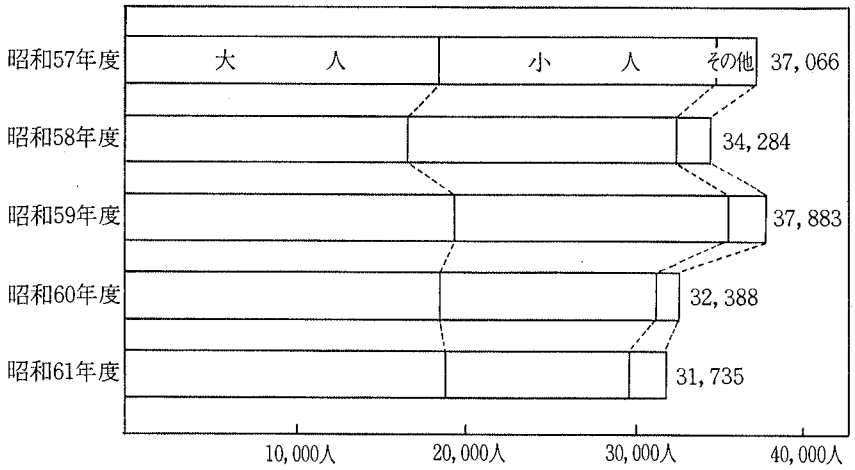
資料館の活動

1．入館者数（昭和61年度）

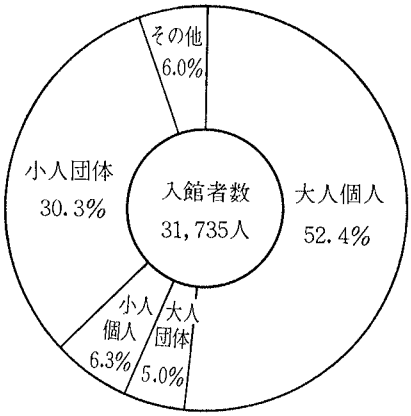
開館以来の累計　376,818

月	大人		計	小人		計	その他	合計
	個人	団体		個人	団体			
4	1,530	123	1,653	202	1,430	1,632	157	3,442
5	1,723	316	2,039	141	2,502	2,643	553	5,235
6	885	213	1,098	64	2,076	2,140	128	3,366
7	1,152	178	1,330	151	134	285	78	1,693
8	2,471	34	2,505	644	0	644	158	3,307
9	1,178	34	1,212	74	289	363	45	1,620
10	1,622	280	1,902	117	2,088	2,205	252	4,359
11	1,981	99	2,080	172	677	849	172	3,101
12	457	14	471	18	63	81	50	602
1	891	0	891	91	0	91	70	1,052
2	789	168	957	34	296	330	116	1,403
3	1,969	113	2,082	310	50	360	113	2,555
計	16,648	1,572	18,220	2,018	9,605	11,623	1,892	31,735

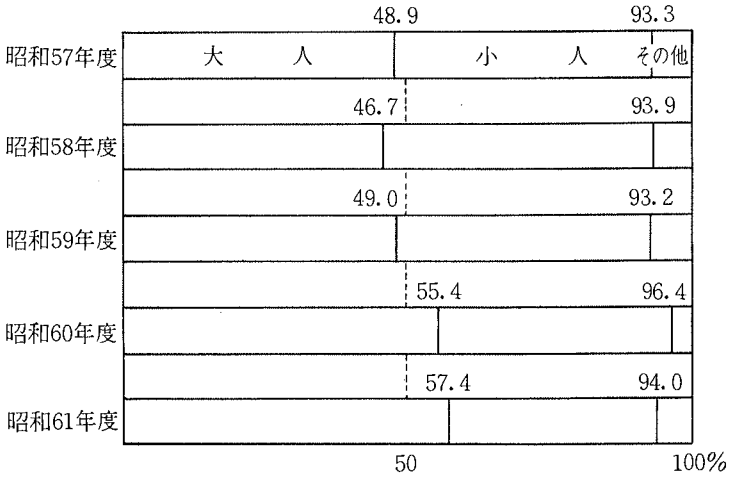
入館者数の推移（昭和57年度から昭和61年度まで）



入館者の構成（昭和61年度）



入館者構成の推移（昭和57年度から昭和61年度まで）



2．年度別予算一覧

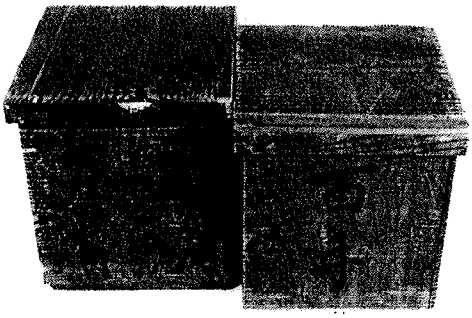
	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	備考
	千	千	千	千	千	
報酬	1,509	1,509	1,557	1,578	1,548	資料館協議会委員、館長報酬
賃金	20	160		137	96	
報償費	65	40	40	35	25	展示資料借上謝礼など
旅費	198	219	255	150	166	
需用費	3,702	4,025	4,229	4,030	4,329	消耗品費、光熱水費、印刷製本費など
役務費	111	105	288	286	150	通信運搬費
委託料	3,716	3,417	3,311	5,360	4,461	事務補助、管理保守、庭園手入委託料など
使用料・賃借料	277	277	277	349	337	複写機使用料など
工事請負費	265	7,701	1,426	25,672	85	補修工事費など
原材料費	67	63	151	62	40	資料作成、修繕用材料
備品購入費	2,500	5,000	17,926	5,466	2,500	図書・展示資料等購入費
負担金補助・交付金	534	541	566	572	439	学会協会負担金、補助金など
計	12,964	22,787	30,026	43,697	14,176	

3．資料収集

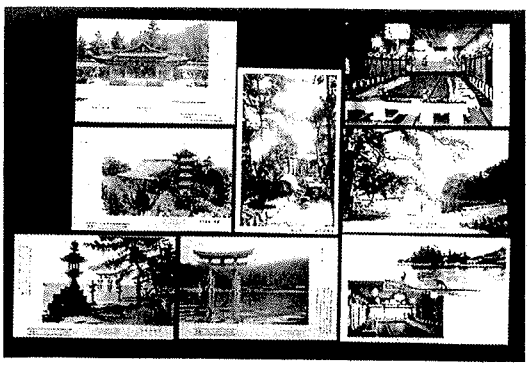
(1)寄贈資料

資料名	寄贈者名	数量・その他
日本三景之一厳島実地真景之図	穴田利光	1点、明治32年、多色刷
本朝勝概記下巻	三村義人	1点、文化11年
日本三景之一厳島写真帖	〃	1点、大正7年
手焼きせんべい焼型	藤山高一	4点
釣燈籠	三宅定和	2点
吊鉤	〃	2点
百手薬師講膳箱	瀧町	3点、元治2年
綿帽子	故山登清子	2点
〃	〃	1点
浴衣	〃	5点
扱帯	〃	1点
長襦袢	〃	13点
羽織	〃	3点
丹前	〃	2点
袴	〃	1点
紋付	〃	1点
帯	〃	2点
角帯	〃	2点
コート	〃	1点
ズボン吊	〃	1点
防空頭巾	〃	1点
ベルト用羅紗	〃	1点
茶羽織	〃	2点
作業着	〃	1点
ひょうたん型茶入	吉村嘉宏	2点
なす型七味入	〃	2点
胴乱	〃	1点
煙管筒	〃	1点
茶入	〃	1点
大鑑札	〃	1点、昭和27年
木材工芸講習證書	〃	1点、大正14年
圧力釜	〃	1点
平鍋	〃	1点
杓子	〃	1点
横杵	〃	1点
五珠算盤	〃	1点
おさる	〃	1点
竿秤	〃	1点
雛祭用屏風	〃	2点
雛祭用床	〃	1点
貼付屏風	〃	1点
撥	〃	2点
愛国手帖	〃	1点
小物入	〃	1点
ランプ	〃	2点
ろくろ用ベルト	〃	1点
ろくろ鉋	〃	9点
台鉋	〃	9点
横挽鋸	〃	5点
たたき鑿	〃	28点
彫刻刀	〃	10点
やすり	〃	11点
金鎚	〃	2点
ドライバー	〃	4点
備中鍬	〃	1点
喜多流謡曲大成天	藤山盛雄	1点、明治40年
〃 長	〃	1点、明治40年
〃 地	〃	1点、明治39年

〃　久	〃	1点、明治40年
能楽大鼓手附	〃	1点
森田流大鼓手附	〃	15点
小鼓手附	〃	15点
大鼓手組覚	〃	1点
笛附	〃	15点
葛野流免状	〃	2点、大正6年
〃	〃	1点、大正14年
神能番組	〃	1点、大正8年
〃	〃	1点、昭和12年
釣瓶	船附理人	1点
絵葉書	岩村喜代人	37点、宮島



百手薬師講膳箱

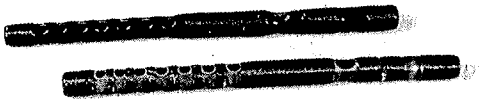


絵葉書

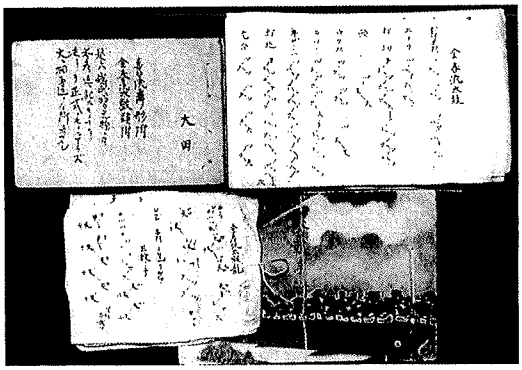
(2)寄託資料

資料名	寄託者名	数量・その他
旅枕	吉村嘉宏	1点
折りたたみ式燭台	〃	1点
飯櫃	〃	1点
宗和台	〃	1点
箱の上蓋	〃	1点、三次雲嶂画
扇風機	〃	1点
竜笛	〃	1点
能管	〃	2点
小太刀	〃	1点、狂言用
狂言台本	〃	51点
間狂言台本	〃	44点
狂言小舞	〃	9点
三番叟	〃	1点
伝書	〃	1点
謡本	〃	2点
舞楽拍子	〃	1点
金剛面寄進之覚	〃	1点
饒津神社能開催に関する書状	〃	4点
狂言装束附	〃	2点
狂言小歌	〃	1点
狂言仕形附	〃	1点
噺子大小附	〃	1点
神能奉納感謝状	〃	1点
工場設置許可書	〃	1点
金春流太鼓附	泉盛夫	4点
森田流笛附	〃	9点
幸流小鼓付	〃	21点
葛野流大鼓附	〃	10点
大小鼓手附	〃	4点
型付・習事	〃	2点
謡本	〃	5点

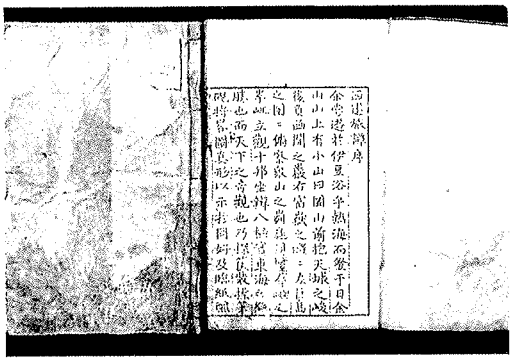
謡　字　引	〃	1点
神能奉納盛謝状	〃	1点
字　鑑	〃	1点



能　管



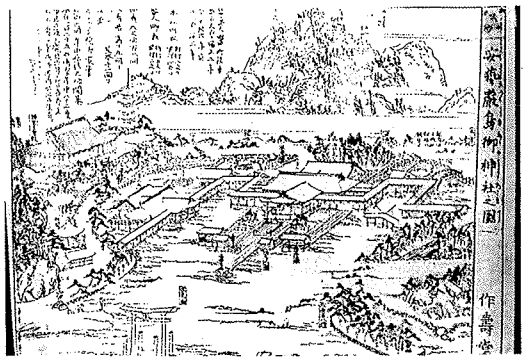
金春流太鼓付



西遊旅譚

(3)購入資料

資　料　名	数量・その他
宮島図	1点、川端玉章画
絵入杓子	1点、里見雲嶺画
日本地誌略図厳島図	1点、多色刷
安芸厳島御神社之図	1点、文政6年、単色刷
日本三景之一厳島神社之図	1点、明治、多色刷
厳島名所図画	1点、明治28年、多色刷
広島名所図画	1点、明治28年、多色刷
厳島社頭図	1点、多色刷
広島市街地図附厳島市街	1点、明治30年
西遊旅譚　上・下	1点、享和3年
厳島大明神御縁起	1点、嘉永4年
日本二千年袖鑑上・中・下	1点、嘉永5年
厳島宮路の枝折	1点、明治17年
厳島みやげ	1点、明治30年
厳島を中心としての文学	1点、昭和5年
安芸備後両国の風俗及伝説	1点、昭和5年
史徴墨宝考證　第2編	1点、明治22年
広島県小誌	1点、大正3年
広島県絵葉書帳	1点



安芸厳島御神社之図

4．調査・研究等

昭和61年 4 月24日：資料調査（広島市・県立図書館）
5 月 2 日：資料調査（広島市・三田嘉一氏）
5 月17日～18日：日本展示学会（堺市）
6 月26日：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（御調郡久井町）
7 月16日：資料調査（広島市・みよし屋、市立中央図書館）
8 月27日：資料調査（厳島神社）
9 月3日：資料調査（大阪市・長島健氏）
9 月 4 日：資料調査（広島市・県立図書館）
9 月18日：資料調査（広島市・三田氏）
10月 3 日：資料調査（大阪市・中尾松泉堂）
10月 4 日～ 5 日：日本民俗学会（吹田市）
10月25日～26日：部落問題研究者全国集会（京都市）
10月29日：資料調査（広島市・県立図書館）
10月30日：資料調査（広島市・三田氏）
11月27日：広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（広島市）
昭和62年 2 月 6 日：資料調査（広島市・三田氏）
2 月14日：資料調査（広島市・市立中央図書館）
3 月 5 日：資料調査（広島市・三田氏）
3 月18日～20日：資料調査（松山市・県史編さん部、県立図書館）

5．展示普及等

昭和61年 4 月16日：米子高専永井氏資料調査（能楽関係資料）
4 月17日：「平清盛像」、「弁才天と清盛」の撮影（ミリオンエコー出版社）
6 月25日：神奈川県・阪井氏資料調査（色揚子）
7 月11日～13日：米子高専永井氏資料調査（能楽関係資料）
7 月25日：「御島廻の図」、「厳島勝景図」、「安芸宮島祭礼之図」の撮影（旺文社）
7 月29日：「玉取祭宝珠」の撮影（RCC）
8 月26日～29日：米子高専永井氏、山梨大学橋本氏資料調査（能楽関係資料）
8 月28日：中国新聞福間氏取材（狂言関係資料）
8 月29日：「厳島図会」、「厳島勝景図」の撮影（広島県港湾課）
8 月30日：読売新聞佐々木氏取材（狂言関係資料）
9 月10日：鳴門市教育委員会視察
9 月11日：広島修道大学後藤氏、国立能楽堂榎本氏資料調査（狂言関係資料）
9 月28日：「平清盛像」の撮影（広島県秘書広報課）
10月 9 日：「平清盛像」、「松明」の撮影（グッディ編集部）
10月14日：佐伯郡議会事務局職員視察
10月16日：「厳島合戦絵巻」の撮影（宮島中学校郷土クラブ）

11月３日～５日：米子高専永井氏、法政大学能楽研究所山中氏資料調査（能楽関係資料）
11月16日：来島研修（ユースホステル協会）
11月18日：広島県婦人教育委員研修会視察
11月20日：「厳島合戦絵巻」、「平清盛像」の撮影（広島ホームテレビ）
昭和62年３月３日：宇部短大林氏資料調査（厳島図屏風）
３月３日：文教大学田口氏資料調査（狂言資料）
３月17日：「彫刻入大杓子」、「絵葉書」の撮影（弘済出版社）

6．歴史民俗資料館協議会

昭和61年度資料館協議会委員

委員名(順不同)　◎は委員長、○は副委員長

後藤陽一　　広島修道大学教授
定宗一宏　　広島文化女子短大教授
沖山裕宣　　広島県教育委員会文化課長
岡田貞次郎
野坂元良　　厳島神社宮司
平山真栄　　大願寺住職
◎岩村益文
小西延穂
木上晴登
宮郷安輝
森脇立夫　　宮島町議会議長
佐々木一彦　宮島町議会副議長
◎藤岡国男
平野勝

昭和61年度資料館協議会

昭和61年7月22日

協議内容

1．昭和60年度の資料館運営
2．昭和61年度の資料館運営
　・ロウケツ染の収集・展示―意味・方法について
　・保存民家の使用―内容・管理方法について

7．購入図書・受贈交換図書

購　入　図　書

編著者名	書　名	出　版
	日本考古学　3・5・7、別巻　1・2	岩波書店
志賀剛	式内社の研究	雄山閣
松山栄治	広島県印刷史	広島県印刷工業組合
	群書解題　6	続群書類従完成会
岡村日南子	内山逸峰集	桂書房
	図説発掘が語る日本史　第5巻	新人物往来社
小山田了三	民俗資料の技術史	東京電機大学出版会
	平家納経　観音品	美術出版
横山重	室町時代物語集　第1～第5	井上書房
	手漉和紙	毎日新聞社
大分県	大分県史　民俗編	大分県
土井作治	幕藩制国家の展開	溪水社
	近代庶民生活誌　第5巻・第9巻	三一書房
三原市	三原市史　第6巻	三原市
松岡久人	安芸厳島神社	法蔵館
	近代部落史資料集成　第4巻・第6巻 第10巻	三一書房
	続群書類従　第1輯上・下、第2輯上・下 第3輯上・下、第15輯上	続群書類従完成会
	続々群書類従　第1・4・5・8・9	〃
宗像神社復興期成会	宗像神社史　上巻・下巻	宗像神社復興期成会
	長野県神社百年誌	長野県神社庁
尾野正晴	美術館	アキラ・イケダギャラリー
広島県教育委員会	広島県の文化財	広島県文化財協会
	御府内寺社備考　第1冊	名著出版
後藤陽一・小林茂	近世中国被差別部落史研究	明石書店
府中市	府中市史　史料編IV	府中市
	能楽全書　第1巻～第7巻	東京創元社
	広島県風土記	旺文社
丹青総合研究所	博物館情報検索事典	丹青総合研究所
R・Sマイルズ	展示デザインの原理	〃

	現代社会教育の課題と展望	明石書店
大藤修・安藤正人	史料保存と文書館学	吉川弘文館
田辺悟	現代博物館論	暁印書籍
	国史大辞典　7	吉川弘文館
	編年差別史資料集成　第6巻・第7巻	三一書房
大津市	新修大津市史　9	大津市
	日本民俗文化大系　第1巻～第14巻、別巻	小学館
下恒内和人	芸備俳諧資料　I	溪水社
	日本地名大辞典　34	角川書店
	瀬野川町史	広島市
	船越町史	広島市合併町村史刊行会
	広島県矢野町史　上巻・下巻	矢野町
	高宮町史	高宮町
	八幡村史	芸北町
	松永町誌	国書刊行会
	庄原市史　近世文書編	庄原市
	神辺町史　前巻	神辺町

逐次刊行物

歴史学研究	551～562
日本歴史	455～466
地方史研究	189～192
広島県文化財ニュース	108～111
博物館研究	第21巻4号～第22巻3号
月刊文化財	271～282
文化財の虫菌害	第11号～第12号

受贈図書

〔読谷村立歴史民俗資料館〕

資料館だより　No.16～No.18

〔大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕

USA　SITE　MUSEUM　NEWS　No.12～No.13

歴史民俗資料館年報　1984年度

〔佐賀県立九州陶磁文化館〕

セラミック九州　No.13～No.14

年報　昭和60年度

〔長崎市立博物館〕

長崎市立博物館々報　第26号

〔飯塚市歴史資料館〕

唐代古墳壁画と西安碑林拓本展

〔福岡市立歴史資料館〕

福岡市立歴史資料館年報　No.14

福岡市立歴史資料館研究報告　第10集

〔福岡市教育委員会〕

聖福寺収蔵品目録

〔北九州市立考古博物館〕

年報　I

青銅器発掘展

〔松山市立子規記念博物館〕

子規博だより　Vol. 5 - 4 ～Vol. 6 - 3

芭蕉・蕪村・子規

〔香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館〕

資料館だより　No.22～No.23

歴史民俗資料館年報　第11号

歴史民俗資料館紀要　第３号

〔徳島県博物館〕

徳島県博物館報　No.54～No.55

徳島県博物館紀要　第17集

〔山口県立山口博物館〕

館報　９号

山口県博物館研究報告　第12号

〔下関市立長府博物館〕

長府藩花押群

土龍窟主人

〔広島県企画振興部〕

土地分類基本調査　呉

〔広島県立図書館〕

広島県内公共図書館郷土資料目録

第30号～第31号

広島県行政資料目録　昭和60年度

〔広島市教育委員会〕

北谷山城跡発掘調査報告

池田城跡発掘調査報告

〔広島市公文書館〕

紀要　第９号

温品・矢野・熊野跡村外役場文書目録

〔広島市郷土資料館〕

郷土資料館だより　第２号～第５号

カキ養殖

〔広島県民センター〕

けんみん文化　1986年５月号～1987年３月号

〔広島民俗学会〕

広島民俗　第25号

〔広島女子大学〕

神の島へ住む人々

〔マツダ株式会社〕

海と山

天地と人

〔海田町教育委員会〕

海田町史　通史編

〔呉市立入船山記念館〕

館報いりふね　創刊号

〔竹原市教育委員会〕

高崎城跡発掘調査報告

〔尾道市立美術館〕

鏑木清方展

浮世絵名品百選展
第29回安井賞展
文化文政期を中心とする備後ゆかりの文人墨客展

〔福山市立福山城博物館〕
桃山と江戸の美

〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕
草戸千軒　第13巻
草戸千軒町遺跡　1984

〔農村文化史料館〕
ひとぐるま　No.2

〔村上正名氏〕
備後の陶磁

〔大聖院〕
霊峰　第263号～第274号

〔宮島町教育委員会〕
ひろしまの遺跡　第24号
山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
歳ノ神遺跡群・中山勝負峠墳墓群
丑寅遺跡発掘調査報告書
銭神第１・３号古墳発掘調査報告書
賀茂学園都市開発整備事業地内遺跡群Ⅰ
大宮遺跡発掘調査報告書
青木原遺跡発掘調査報告書
郷貝塚発掘調査報告書

〔岡山県立博物館〕
岡山県立博物館だより　25号～27号
年報　昭和57年度～昭和59年度
研究報告　6
研究報告　7

〔神戸市立博物館〕
博物館だより　No.15～No.18
神戸市立博物館年報　No.3
神戸市立博物館研究報告　第３号

〔奈良県立民俗博物館〕
民俗博物館だより　Vol.XII No.4～Vol.XIII No.2
民俗博物館研究紀要　第10号

〔ミキモト真珠島〕
真珠博物館
縄文真珠

〔国立民族学博物館〕
国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告集　7

〔大阪市立博物館〕
大阪市立博物館報　No.25

〔日本民家集落博物館〕
民家集落ふるさとだより　No.5

〔京都府立山城郷土資料館〕
山城郷土資料館だより　第４号～第５号
山城郷土資料館報　第４号
発掘調査速報
燈明寺の文化財
山城町の歴史と民俗

〔京都市歴史資料館〕
京都市歴史資料館年報　No.4
京都市歴史資料館紀要　第３号

〔石川県立若狭歴史民俗資料館〕
友の会だより　１号

〔石川県立歴史博物館〕
石川れきはく　第１号～第２号
石川県立歴史博物館要覧

〔松本市立博物館〕
あなたと博物館　No.21
郷土の絵馬展

〔名古屋市博物館〕
名古屋市博物館だより　49号～54号

〔沼津市歴史民俗資料館〕
資料館だより　Vol.12 No.1～Vol.12 No.5
沼津市博物館紀要　10
駿河湾・船の文化

〔新潟県美術博物館〕
美術博物館だより　28
〔平塚市博物館〕
平塚市博物館年報　No. 9
平塚市博物館研究報告　No. 9
王子台遺跡発掘調査報告書
相模川流域の自然と文化
〔神奈川大学日本常民文化研究所〕
民具マンスリー　第19巻1号～第19巻9号
歴史と民俗　1
要覧　1986
仕事着―東日本編―
〔紙の博物館〕
百万塔　No.64～No.66
〔家具の博物館〕
和簞笥百選
〔大田区立郷土博物館〕
郷土博物館だより　第13号～第15号
博物館ノート　No.19～No.33
大田区立郷土博物館概要
大田の職人
くらしとあかり
埋もれていた日用品の美
明治の東京・女性・こども
東京の郷土玩具・江戸の和船
こよみと和時計
なつかしの音　蓄音機
〔サントリー美術館〕
サントリー美術館ニュース　第83号～第89号
〔ペンタックスギャラリー〕
Pentax Gallery News　No.64～No.67
〔郵政省逓信博物館〕
資料目録　No.34
資料目録　No.35
館外資料目録　下
〔お茶の水女子大学学芸員課程〕
博物館実習報告　第2号
〔丹青総合研究所〕
文化空間研究
〔埼玉県立博物館〕
さいたまのはくぶつかん　第6号
紀要　第12号
古代の祭祀
海上之邦　おきなわ
〔埼玉県立歴史資料館〕
館報　第7号
〔千葉県立総南博物館〕
総南博物館報　第31号～第33号
〔千葉県立多古高等学校〕
民俗資料館目録
〔群馬県立歴史博物館〕
博物館だより　No.23～No.25
群馬県立歴史博物館年報　第7号
郷土人形の世界
人と動物の歴史 狩り
〔会津民俗館〕
会津民俗館だより　第14号
〔秋田県立博物館〕
博物館ニュース　No.57～No.62
館報　昭和60年度
秋田県立博物館研究報告　第11号
〔宮城県立東北歴史資料館〕
東北歴史資料館報　第14号～第16号
多賀城とその周辺
東北歴史資料館年報　昭和60年度
〔岩手県立農業博物館〕
農業博物館だより　No.39～No.41
水稲品種変遷の冷害史からの考察
〔根室市教育委員会〕
根室市博物館開設準備室紀要　第1号
〔高松敬吉氏〕

下北半島におけるマチ（町）と祭りの民俗学的研究

〔寺田寅男氏〕

所沢市史研究　第10号

町史のあゆみ

1．日誌から

昭和61年10月１日　木上晴登氏来室。

10月２日　木上氏・水族館山下欣二氏来室。橋本氏来室（厳島砲台）。

10月３日　『石造物編』調査（宮島）、是光吉基氏。

10月４日　木上氏来室。

10月６日　木上氏来室。郷土学習講座第48回。

10月６～９日　『民俗編』調査、呉高専佐々木卓也氏。

10月７日　神奈川竹林氏来室（厳島合戦）。

10月８日　事務補助員小田規子氏初出勤。江波毛利氏来室（管絃祭）。

10月９日　林勝治氏・教育長・木上氏来室。

10月10日　郷土学習特別講座（厳島神社宝物名品展）。

10月11日　石造物青山氏・広島大学関太郎氏来室。

10月13日　宮島町史編さん副委員長松岡久人氏来室（反古裏経）。

10月14日　木上氏来室（絵馬鑑）。水族館山下氏来室。

10月15日　是光氏来室。自然と人編シカ調査、林氏。

10月16日　水族館山下氏来室。

10月16～17日　『石造物編』調査（尾道）、是光氏。

10月17日　木上氏来室。

10月18日　ナック録画撮影協力。

10月20～22日　厳島神社社務所調査。

10月24日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。

11月４日　木上氏来室。

11月７日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。

11月8日　木上氏来室。

11月10日　郷土学習講座、第49回。

11月11日　広島健婦組合来島研修。

11月13日　林氏・岩村氏来室。

11月14日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。山下氏来室。

11月15日　石造物青山氏来室。

11月19～20日　厳島神社社務所調査。

11月22～23日　『民俗編』調査、佐々木氏。

11月27日　歴史民俗資料館等連絡協議会、広島市。

11月28日　岩村喜代人氏来室。

11月29日　木上氏・水族館山下氏来室。

11月29～30日　中四国民具学会、岡山市。

12月１日　林氏・宮島野鳥の会熊谷美登氏来室。郷土学習講座、第50回。

12月２日　林氏来室。

12月４～５日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。

12月６日　郷土学習特別講座（厳島神社宝物名品展）。

12月８日　林氏来室。

12月９日　林氏・木上氏来室。

12月11～13日　国立歴史民俗博物館調査員会議。

12月15日　山下氏来室。

12月17日　林氏・木上氏来室。

12月18日　廿日市町一色氏来室。

12月23日　木上氏・山下氏来室。

12月24日　木上氏来室。

12月25～26日　『石造物』・『民俗編』合宿調査（宮島）。

昭和62年１月５日　石造物青山氏来室。

１月６日　熊谷氏来室。

１月７日　木上氏来室。

１月８日　厳島神社訪問。

１月12日　山下氏来室。郷土学習講座、第51回。

１月13日　林氏来室。

１月14日　山下氏来室。

１月19日　林氏来室。

１月20日　岩村氏来室。

１月23日　木上氏来室。

１月24日　岩村氏来室。

１月24～25日　『自然と人編』昆虫調査、水田国康氏。

１月27日　職員同和研修。

１月28日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。警察学校来島研修。

１月30日　林氏・水田氏来室。

１月30～31日　厳島神社文庫調査。

２月２日　岩村氏来室。厳島神社訪問。郷土学習講座、第52回。

2月5日　林氏・木上氏来室。

2月9日　編さん委員平山真栄氏葬儀。

2月10日　厳島神社訪問。

2月12日　山下氏来室。

2月13～14日　厳島神社文庫調査。

2月16日　鳥取米原氏・山下氏来室。

2月18日　『自然と人編』水生生物調査（東京）、山下氏。

2月20～21日　厳島神社文庫調査。

2月23日　岩村氏・米原氏来室。

2月25日　岩村氏来室。

2月26日　山下氏来室。

2月27日　是光氏・山下氏来室。

3月2日　廿日市町小西氏・山下氏・林氏来室。郷土学習講座、第53回。

3月4日　山下氏来室。

3月6日　山下氏来室。

3月9日　山下氏来室。

3月9～18日　『民俗編』調査、竹中順子氏。

3月10日　広島大学福岡義隆氏来室。

3月11日　編さん委員藤原健蔵氏来室。山下氏来室。

3月14日　岩村氏来室。

3月19日　戸河内町道教氏・佐々木氏来室。

3月22～26日　『自然と人編』シカ調査（青海苔浦）、林氏。

3月23日　編さん委員定宗一宏氏・文化女子短大前田氏来室。

3月24～28日　『民俗編』調査、神保教子氏。

3月25日　山下氏来室。

3月26日　林氏・岩村氏・白井氏・木上氏来室。

4月4日　木上氏来室。

4月6日　山下氏来室。副島氏来室（紅葉谷改修）。郷土学習講座、第54回。

4月9～18日　『民俗編』調査、竹中順子氏。

4月10日　木上氏来室。

4月11日　編さん委員岡田貞治郎氏葬儀。

4月15日　岩村氏・林氏来室。

4月18日　木上氏・広島大学朝倉尚氏来室。

4月28日　基町高校赤木氏来室。

5月1日　編さん副委員長松岡久人氏来室。

5月1～7日　『民俗編』調査、野上彰子氏。

5月2日　向井義郎氏来室。

5月6日　林氏来室。

5月11日　岩村氏来室。郷土学習講座、第55回。

5月15日　朝倉氏来室（御島廻り）。

5月16日　編さん委員長後藤陽一氏来室。

5月16～18日　中四国民具学会、高知県土佐山田町。

5月18日　山下氏来室。

5月20～27日　『民俗編』調査、竹中順子氏。

5月22日　職員同和研修。

5月23日　木上氏・岩村氏来室。

5月27日～6月1日　『民俗編』調査、野上彰子氏。

5月30日　是光氏来室。

6月3日　千畳閣懸魚調査。

6月5日　編さん委員土井作治氏を訪問。

6月7日　編さん委員土井作治氏を訪問。

6月12日　岩村氏来室。

6月16日　船附理人氏来室（写真）。

6月17日　美和町鎌倉光子氏来室。

6月18日　千畳閣懸魚調査。

6月20日　木上氏来室（民俗編章立て）。

6月22日　木上氏来室（民俗編章立て）。

6月23日　厳島神社訪問。

6月25日　広島県歴史民俗資料館連絡協議会、佐伯町。

6月28日　専門委員会（民俗編）。

7月2日　一色氏来室。

7月4日　岩村氏来室。

7月6日　郷土学習講座、第55回。

7月8～15日　『民俗編』調査、竹中氏。

7月11～12日　『自然と人編』昆虫調査、水田氏。

7月11～16日　『民俗編』調査、野上氏。

7月20日　広島修道大学博物館実習。

7月22日　編さん委員長後藤氏来室。

7月23日　林氏来室。

7月25日　木上氏来室。

7月26日　井口中学校生徒来島研修。

7月29日　広島県倉橋氏来室。

7月31日　山下氏来室。

昭和62年8月3～4日　山下氏来室（芸備日々新聞調査）。

8月3日　郷土学習講座、第56回。

8月5日　専門委員会（地誌紀行編）

8月6日　山下氏来室。

8月10日　東京斎藤氏来室。

8月10～11日　『自然と人編』昆虫調査、水田氏。

8月10～17日　『民俗編』調査、野上氏。

8月21日　町史打ち合せ会。

8月25日　広島県菅波氏来室（宮島の町模型）。

8月27日～9月1日　『民俗編』調査、竹中氏。

8月28日～31日　『民俗編』調査、栗原秀雄氏。

8月29～31日　『民俗編』調査、友久武文氏。

9月1日　広島市小林正典氏来室。

9月7日　郷土学習講座、第57回。

9月9日　岩村喜代人氏葬儀。

9月16日　木上氏来室。

9月18日　文化女子短大前田氏来室。

9月20～28日　『民俗編』調査、野上氏。

9月28日　呉高専佐々本氏、船附氏、観光協会中道氏来室。

9月29日　木上氏、広島大学学生（地図）来室。

10月1日　船附洋子氏、広島修道大学生来室。

10月2日　県立博物館準備室佐藤氏来室。

10月5日　郷土学習講座、第58回。

10月6日　広島農業短期大学生来室。

10月7日　木上氏、広大生来室。

10月8日　瀬田氏、中国新聞林氏（誓真）来室。

10月8～17日　『民俗編』調査、野上氏。

10月15日　朝倉尚氏来室。

10月26～31日　『民俗編』調査、竹中氏。

10月30～31日　『自然と人編』調査、福岡氏。

10月31日　編さん委員藤井昭氏、広島大学安田喜憲氏、木上氏来室。

11月2日　『石造物編』調査（宮島）、是光氏。

11月5日　広島女子大学谷富夫氏、広島大学渡辺則文氏来室。

11月6日　谷富夫氏来室。

11月9日　郷土学習講座、第59回。

11月12日　呉高専佐々木氏来室。

11月17日　山下氏、広島大学生来室。

11月18日　木上氏、サンド薬品八谷氏来室。

11月19～28日　『民俗編』調査、竹中氏。

11月21～23日　日本民具学会、印分県。

11月23～28日　『民俗編』調査、野上氏。

11月24～28日　『民俗編』調査、神保氏。

11月25日　編さん副委員長松岡氏訪問。

11月26～27日　広島県歴史民俗資料館等連絡協議会、豊町。

11月28～29日　中四国民具学会、島根県。

11月30日　呉高専佐々木氏来室。

12月１日　NHK岡本氏来室。

12月７日　呉高専佐々木氏、山下氏来室。郷土学習講座、第60回。

12月24日　木上氏来室。

12月25日　県立博物館準備室・後藤氏・佐藤重夫氏(宮島の町模型)、新沢氏(杓子) 来室。

2．委員会から

①昭和62年６月28日　民俗編の専門委員会を広島県社会教育センターで開催した。

出席者：後藤陽一氏、藤井昭氏、友久武文氏、栗原秀雄氏、西井章氏、谷富夫氏、佐々木卓也氏、編さん室。

それぞれの担当者が、各部門の進捗状況と今後の見通しを報告した。

宮島の生活は、島だけでは成立しえない部分が多い。例えば、「肥」の問題は対岸の大野との結びつきが強い。それらとの関連の中で、宮島を特徴付けるような民俗編にする。

②昭和62年８月５日　地誌紀行編の専門員会を広島ターミナルホテルで開催した。

出席者：土井作治氏、頼祺一氏、児玉正昭氏、三宅紹宣氏、山田教育次長、編さん室。

現在までの資料収集を検討し、増巻の可能性について協議する。

③昭和62年８月21日　町史打ち合わせ会を楽々園公民館で開催した。

出席者：後藤陽一氏、松岡久人氏。大島教育長、山田教育次長、編さん室。

3、調査活動から

（1）　文献資料調査

①厳島神社社務所の近代関係資料、とくに日誌、庶務記録、山林関係記録の写真撮影を行なう。

②編さん委員頼祺一氏ほかの協力をえて厳島神社文庫所蔵資料の目録作成を行なう。

（2）　民俗編調査

東京の神保教子氏、竹中順子氏、野上彰子氏の協力をえて調査を行なう。

調査日数は、120日に及んだ。

（3）　自然と人編調査

昆虫をはじめ、各部門とも精力的に調査を行なった。

4．その他

町広報紙に『町史の窓』を連載する。

昭和61年10月	第30回	「社領の成り立ち」	第334号
11月	第31回	「厳島への旅」	第335号
12月	第32回	「旅と記録」	第336号
昭和62年１月	第33回	「千僧供養日記」	第337号
２月	第34回	「景色を見る旅」	第338号
３月	第35回	「公園としての宮島」	第339号
４月	第36回	「公園の改良」	第340号
５月	第37回	「人の数（人口調査）」	第341号
６月	第38回	「厳島の人口」	第342号
７月	第39回	「『西遊雑記』の厳島」	第343号
８月	第40回	「厳島を訪れた人たち（１）」	第344号
９月	第41回	「厳島を訪れた人たち（２）」	第345号
10月	第42回	「厳島を訪れた人たち（３）」	第346号
11月	第43回	「厳島を訪れた人たち（４）」	第347号
12月	第44回	「猶貫の旅」	第348号

松永権守

井関恒之進（京都）

宮嶋小浦船頭

住吉丸　大坂屋清吉

悴　源次郎

水主　増吉

〃　孫次郎

藝州佐伯郡宮嶋瀧町

小川益太郎

紅五ツ、あい三ツ、
キヤマン徳り壱ツ

廿九日
一、四匁五分　きんちやく壱ツ
〃
一、弐歩弐朱　角湯形？
〃　地壱匁
一、壱歩弐朱五十文　紅あい地扇子弐本、
〃　おわいろ〳〵？
一、九百文　御供奉御役人付
〃　三冊
一、百五十文　名所壱ツ
〃
一、弐百文　年歴箋壱ツ
〃
一、壱朱　りうのふ
〃
一、弐朱　包ひもの
〃
一、八百拾文　手掛三ツ

四日
一、弐百八十文　アブト下浜
内弐拾文豊助出ス　ニ而ます六十文、
口なし七ツ、三十文ツ、

七月六日
一、金壱歩　船頭清吉へ
取かへ
〃
一、弐匁　音戸ニ而
さかな
七両弐歩、内三両三歩渡し
一、三両三歩　船ちん
〃
一、百弐拾六文　十四日分
賄料、
一日三文ツ、

正親町様御内
喜多村雅楽
松本伊織

〃　下た八足
一、壱両弐歩弐朱ト五十文　博多帯、
〃　男分壱筋
一、七百文　雲上弐冊、道中
記壱冊、歌本壱ツ

廿七日
一、百五十文　かんさし
三ツ
〃
一、百文　さし、
此方さし弐百文取

廿八日
一、三朱ト百文　朱あん焼壱ツ
〃
一、六百五十文　たばこ、并
船頭升吉へ
百目遣ス
〃
一、十六文　風呂せん

一、三朱ト五十文　帯仕立代
〃
一、壱歩弐朱　傘壱本
〃
一、壱歩　ふりてりかさ
〃
一、六百文　案内者へ
〃
一、六十四文　御所ニてところてん
〃
一、四十五文　なし
〃
一、十六文　風呂せん
〃
一、壱歩　加賀吉へ
かけもの、
ひよう包
代之内へ渡ス
〃
一、百七十弐文　かんてら壱ツ

廿九日
一、壱歩三朱三百五十文　なこ屋扇子
六本、あせ取り、

廿六日
一、壱歩壱朱　人足ちん、青木百、小川百　一、三朱　すたれ壱ツ、すいろ〳〵、翠簾へ頼置

〃　伏見泊り、四人分、北六ニ而　〃　一、弐百五十文　大奉書五匁

〃　髪結ちん　〃　一、百廿四文　小奉書五匁

一、四十文　〃　一、四十弐文　たキ長金水引弐わ

〃　風呂せん　〃　一、廿文　同小四わ

一、十六文　〃　一、拾弐文　のし

廿六日　正親町様御進物用

一、八百九十四文　清水焼きび　〃　一、金壱朱廿文　竹肴かこ

しう、丼いろ〳〵　〃　一、壱貫七百文　切ねぼん三ツ、じょろ、さし五ツ、小さし五ツ

〃　風呂せん、此方・船頭升吉分　〃　一、壱貫七百文　扇子かけ五ツ

廿七日　髪結代　〃　一、三百五十文　しをり五ツ

一、三十五文　〃　一、八百十弐文　ふしいろ〳〵

〃　風呂せん　〃　一、壱両　草履、雪た、

一、十六もん

廿六日

同
一、百五拾文　三人　髪結ちん　益太郎分
〃　〃　百文　ねき
一、三十六文　三人　風呂せん　〃　弐歩弐朱ト五十文　たばこ入、細緒じめ、きせる
六月廿二日
一、金壱朱　明石湊へ入、神酒船頭共へ遣ス　〃　三百七十文　抹消□はや風呂、行平
廿三日
一、三百七十文　しら菊酒壱升　〃　九十三文　くす湯二ツ、小川・豊助、佐伯・青木二ツ
一、四百文　上たはこ五十目　〃　壱歩弐朱　こくら帯壱筋
廿五日
一、四十八文　さとう湯　一、壱貫文　枚方ニ而昼飯四人分、小川取かへ
〃　〃　一、弐百文　淀ゟ伏見迄
一、六十文　とうふ
廿四日
一、四十八文　髪結、

五ツ時頃音戸江参ル、夫より
なかし、昼過東風ニなる

買物覚

六月十六日
一、金弐歩　革こり壱ツ、坂口屋槌蔵
〃
一、三匁弐分　布財布壱ツ
一、壱匁弐分　細引壱わ
一、壱匁三分　同
〃
一、三匁　ちゝミ　内かい　平岩

十七日
一、　ふじ上衣、裏付壱足

十八日
一、九匁五分　戸太ニ而鯛壱匁

十七日
一、金三両弐歩　船賃之内　船頭清吉へ渡ス

廿日
一、五百五十文　小肴いろ〳〵、水嶋ニ而三百文　青木出ス、弐百文佐伯、五十文此方出ス

廿一日
一、銭弐十文　備前国出サキ
但、出サキト申ス民家ニ而、海中ゟ上り申候石所望いたし、価ひ本文之通、同方いろ〳〵石所持仕候

同
一、金壱朱　出サキニ而酒壱升買

廿二日
一、五百文　壱朱銭百文、あかへい壱ツ、くち壱ツ

三十石船へ乗り、暮過八軒へ参り、
旅人揚ケ、夫より五ツ時頃筑前
橋下へ着、直ニ本船へ御翠簾
其外荷物等積込、最早酒屋
其外戸立申候間湯も不遣、一杯酒も
得呑不申候而草臥なかし寝
候節、夜半頃白雨一シキリ
在之候

一、七月朔日天気、早朝大坂筑前橋
出し、御関所速ニ通リ、夫ゟ
川口出し少々まきり、八ツ時過
かう部着、此所へ揚り町通行、
髪結風呂未始メ不申候間、暫く
相待申候処、風呂も始メ申候間、風呂へ
入、さけ弐升、其外青物・茶
相求メ、此所出し、夜四ツ時頃
明石着、此所ニ而船懸り

一、二日天気、夜明方明石沖出し、
五ツ時頃二見沖参ル、此所ニ而
朝飯、風も無之穏なり、夫ゟ
マキリ、おし付昼姫路沖かゝり、
昼飯認メ、夫より出し申候へとも、
西風強くマキリ候而、夜四ツ
時頃牛窓沖へ参ル、此所へ泊ル

一、三日晴天、極朝牛窓沖出し、
五ツ時頃備前岡山沖ニ而朝
飯、夫より出し候へとも、菟角
西風強く、ヒゞ江九ツ時頃懸り、
認メいたし、風呂へ入、暫く見合
候へとも西風強く、夕方此所出し
候処、矢張風強く候へ共マキリ
候而、漸々暮五ツ時頃下津井
着、湊へ入泊ル

一、四日晴天、矢張り西風ニ候へ共、
風もやすミ候趣ニ付、早朝此所下津井
出し、マキリ〳〵候而昼過白石へ参ル、
夕方アブト下の浜へ着、此所へ
泊ル、夜明方此所出し

一、五日晴天、五ツ時頃のふ路へ
参ル、夫よりマギリ、漸々
よと嶋へ夕方着、此所へ泊ル

一、六日晴天、夜半頃よど嶋出シ、

一、茶・たはこ饗へ出、無程御逢被下候間、
棚守ゟ口上申入候処、至極都合
宜候間引取、帰り買物仕帰る

一、夕方安居御殿、同御国御勘定
所内、井関恒之進殿へ坂井氏ゟ
書状在之候間、同方へ罷越し
申候処、丁度御出違ニ付、小廻り
江坂井ゟ之書状相渡し、いさゐ小廻りへ
口上申入、直ニ帰ル、暮町へ買物ニ出ル、
夕方少々白雨仕候事

一、廿八日晴天、仕舞仕、御勘定所井関
恒之進殿へ参候処、御目ニ懸りいさゐ
申入候処、船者高瀬へ相積せ、伏見
方ニ而肥後屋清兵衛方御用聞
ニ付、同方へ罷越し候様被申聞、将又
坂井へ返書等認メ置申候間、御人被下候
様被申聞候間、挨拶仕帰ル、止宿
吉兵衛与段々申合候処、いつれも
伏見へ出し候分、宜御用之義ニ付、
高瀬船之処も宜候得共、ひま入
一日之事ニ相成かたく事義ニ付、
又々井関へ罷越し、高瀬之処者
返替何れニも伏見へ罷越し候分
治定、依之高瀬船御用聞山崎
屋方へ、亭主吉兵衛とのヲ以申遣ス、
無程帰り申候処、高瀬船差間
ニ付、明後日被成下候様の所へ
吉兵衛参り、同方様子承り
案心仕候、八ツ時過ゟ案内
之者召連レ、御所・下加茂
参詣、夫より上加茂、夫ゟ
天満宮社へ参詣、暮過
帰り湯屋へ参り、夫ゟ夜飯、
夫より荷作いたし、さけ
段々事、御翠簾
夕方止宿へ取寄せ候事

一、廿九日天気、極朝ゟ仕度いたし、荷
物等人夫雇ひ、宿亭主荷物
見合として、伏見迄佐伯氏与先達而
出せ、此方少々買物在之候ニ付
少し暇乞、夫より豊助・宿亭
主悴亀吉同道、并僕船頭
升吉相連レ伏見迄着、同所
宿北六方ニて昼飯認メ、直ニ

参仕候事故、心遣ひ不大方、
漸々夜五ツ時頃伏見へ着、宿
北屋六兵衛と申方へ揚り、風呂へ
入夜飯たへ、膳の上ニ而さけ少々たへ、
夫より寝候義ニ候得とも、金持参
仕候故、皆々得寝不申、とろ〳〵と
申内、最早六ツ時前頃寝る也

一、廿六日天気、極朝伏見出立、夫より
竹田道罷越し、京都東木屋町
四條弐丁下ル近江屋吉兵衛方へ
着仕、皆々大案心、夫より髪
結風呂へ入休足、昼飯相済せ、
東二條川端御翠簾屋葭屋貞二
兵衛方へ三人同道、僕升吉召連
罷越し申候処、最早御翠簾
箱へ入、荷作仕置候得とも、一応見分
仕、少々御縁り等直し方申付、失捻
無之様申付、代金弐百七十壱両
弐分壱朱、内四十両先金渡し、
差引弐百三十壱両弐分壱朱渡し、
請取書渡させ帰ル、同方ニ居申節
少々白雨いたし候、夫より宿へ帰り、
夕方六波羅寺・清水へ参詣、帰り
八坂塔・祇園様へ参詣、祇園町通り
此節芝居小屋新出来相成、美々しく
事ニ御座候、夫より帰り、風呂へ入
休足、夜ニ入四条涼ミ見物ニ参ル

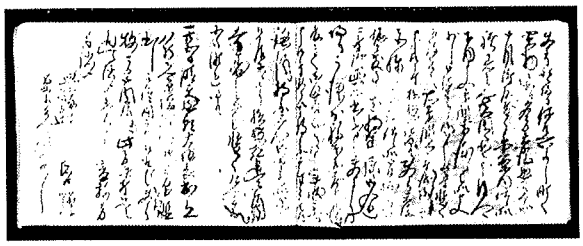
一、廿七日天気、仕舞仕、早朝相済せ
正親町御殿へ罷出、松永権守殿
御出勤ニ御座候哉、取次ヲ以相尋囉ひ
申候処、此節風邪ニ而御出勤無之、
松永御屋敷相尋申候処、新烏
丸ニ付相尋、松永御屋敷へ参候処、
御逢ひ被下、前廉
献上
一、金海鼠　壱箱
但、奉書ニ而弐枚重包、水引掛
のし相添へ
正親町御殿へ
呈上
一、金海鼠　壱箱
但し右同断
御三人衆へ
外ニ
金弐百疋　松永様へ上ル

藝州

松平安藝守領分
厳島社務　割印
棚守将監家来
小川益太郎
僕　壱人

右可被相通候
六月廿五日　御目付方　厳字印

夫より船へ帰り休足いたし、町へ
買物ニ出ル、夕方天満惣会所
御目附屋敷へ参、案内仕候処、
袴着之人玄関へ出被申、同人へ
下伺申入、印鑑相渡し申候処、申入
少し御待可被下候様被申候ニ付、暫く
相待居候処、右印鑑へ付紙添へ出
申候ニ付、挨拶仕帰ル、夫より天満
宮様へ参詣仕候処、御日柄ニ付
振々敷事、尤将軍様御入込
ニ付、御輿等出不申候、夫より
帰り、うつほ福本屋庄右衛門
殿方へ御伺、善助との5書状参り
申候ニ付、夫ヲ以尋参、土産者尾道



銘酒持参、三人連ニ而参候処、内ニ
被居、直ニ上リ挨拶仕、追々酒
肴・すし等出、暫くたへ、暮
五ツ時過帰ル

一、廿五日晴天、極朝大坂表出立、
八軒先京橋御関所ニ而印鑑
出し、其儘同方へ被取申候、夫より
枚方（ヒラ）御関所へ此方書付先之
通ニ認メ置通り申候、昼枚方
ニ而認メ

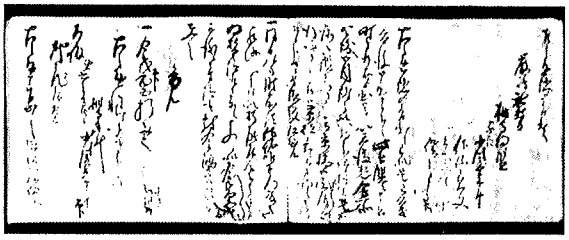
皿（塩付なます）　猪口（茄子かつの物）
菓子わん（椎たけ こんふ いも）　めし

膳上ニ而僕増吉へさけ壱合
呑せ候、暫く休足、夫より此所出立
いたし候処、一向風者無之、暑大因り申候、
夫より漸々はし元江参り、同
方入口御関所、答右同断
ニ而通り申候、夫より淀へ罷越
申候処、最早夕景ニ相成申候得共、
何様急キ申候事故、伏見へ越し
同方へ係り申度と存、道あせり
最早川端・土手長イのニ者皆々
大こまり、其上日者暮、金者持

後御出被下候様被申聞、将又京都江
御越しニ御座候得者、帯刀いたし候者共、
此節至而六ケ敷、印鑑無御座候而ハ
一向通行六ケ敷ニ付、御不案内ニ御座候間、
御奉行津村亀太郎殿方へ御出
候得者取次罷出候間、明日京都表へ
罷越し申度奉存候ニ付、印鑑宜敷
御願申上候段、取次衆へ申入候処、書付
御認メ被下候様ニとの義ニ付、棚守手代小川
益太郎ト差出し申候、又々好御座候間、
左之通認メ差出ス

厳島社務方
棚守将監
家臣
小川益太郎
〃
佐伯喜太夫
〃
青木豊助
僕　壱[人]

右之通認メ差出し申候処、是ニ而宜敷、
昼後御出可被下候、此印鑑と申者
町奉行所ゟ出、是ヲ以天満惣会所
公儀御目附之処へ持参仕候得者、是[ヲ]



添へ鑑居り申候而、京橋口関所通
行、帰り候節ハ京都表ニ而尋候事
被申候ニ付、挨拶仕帰ル

一、同日、八ツ時前頃佐伯唯右衛門殿方へ
罷越し申候処、折能居合被申候ニ付、
為替請取ニ参候、申入候処、金弐百五十両
被渡候ニ付請取、封金嶋差包せ
在之候

覚

印

一、金弐百五拾両也
右之通慥ニ受取申候事
棚守手代　小川益太郎　印
丑六月廿四日
大坂
御蔵屋敷

右之通差出し、挨拶仕帰ル、
夫より津村様へ参、今朝
印鑑受取ニ参候、申入候処、下役
吉田健次郎へ申談置候間、
同方へ罷越し頼候様被申聞、
直ニ吉田氏へ参候処、右印鑑
相渡ル

船頭へ遣ス、夜半頃白雨、尤只纔ニテ
晴ル

一、廿三日曇天、風も格別無之趣ニ付、
外船も出し申候間、此方舟出し、追々
沖も晴レ、舞子・須磨浦舟中ゟ
見受、先年陸ニテ罷越し候節思ひ出し
申候、船まきり、風程よく相成、
八ツ時前頃安治川橋入、玉水町
大坂屋庄蔵問屋下へ船着、夫ゟ
御蔵屋敷早速喜右衛門殿江佐伯
同道罷越し申候処、米方へ御出勤
之御様子ニ付空敷帰り、又々暫く
して罷越し申候へとも、未御帰り無御座
ニ付、暫く待合居申候処、御帰之趣ニ付
罷越し申候処、御人有之趣ニ付見合、
坂井氏ゟ之書状兼而前ニ罷越
候節、差し出し置返答、慥ニ受取
申候との義御座候、漸々早速江
御目に懸り申候処、今日は御立入
よはれニ付、一寸御目ニ懸り申候との事、
一応御役所ゟ御伝言申入候処、先に
書状参り申候処、其後一円御沙汰無
之ニ付、其儘ニ相成候哉、未此元ニ御座候哉
との御返答、何れ明日出勤之上
相しらへ可申候との義御座候、何角
御噺可申上義候処、何様御出懸ケ、殊
御人者有之趣ニ付、そこ〳〵ニして
御暇乞仕帰ル、前方金へん
一包一曲奉書ニ而包、水引かけ
御土産差出ス、同夜船ニ而船頭へ
さけ呑せ候事

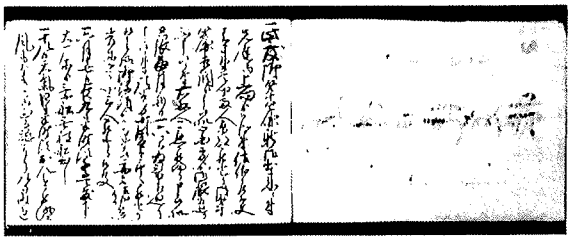
一、廿四日晴天、五ツ半時頃御蔵屋敷
早速喜右衛門とのへ罷越し申候処、只今
御目ニ懸り申度奉存候へとも、さし向
御用状認メ居申候ニ付、佐伯唯右衛門
方へ罷越し候様被申聞候ニ付、直ニ佐伯
氏へ罷越し申候処、丁度内ニ被居候ニ付、
直ニ御目ニ懸り、昨日早速参候様子申入
候処、節角御状参り居候へとも、たれも相見へ
不申候ニ付、いかゝ候哉尋候、其元ゟ之書状御真ニ
御座候、併合印御持参御座候哉との
儀御尋ニ付、則此書状之内ニ御座候、
直ニ合印出し佐伯氏へ相渡し候、御金
いつ頃御渡し被成下候哉与相尋申候処、大事
なる物故、御蔵本へ御預ケ置申候
間、是ゟ駈合可申候ニ付、昼八ツ時前

一、此度御翠簾新御出来ニ付、
先達而上向ら被仰付、佐伯喜太夫・
青木豊助両人京都罷登り、御翠
簾相調ひ申候処、御国方ら御銀相廻り
不申候ニ付、右両人一応罷帰り申候処、
御銀当月朔日、一六ニ而為替相廻り
申候ニ付、請取方小川益太郎へ罷登り
候之様御役所ら被仰付候、亦々佐伯喜太夫・
青木豊助三人罷登り候事

一、六月十七日夜九ツ半時頃、千畳敷下
大雁木ら乗船、無程船出し

一、十八日天気、四ツ半時頃おんと罷越ス、
風もなきニ而至而穏なり、八ツ時過
渡太与申所へ参り、追々宮嶋参
詣船も皆々此処へ集ル、曇天ニ相成
少々ツ、雨降、此所浜辺ニ御社アリ、
至而風景宜敷所なり、雨も晴、
此所夕方出し、同夜半頃竹原江参ル

一、十九日天気、早朝竹原沖出し候へとも、
なきニて漸々尾道向嶋辺へ昼後参り
候ニ付、富濱小谷屋方へ揚り湯浴いたし、



直ニ乗船可致候処、汐合悪敷風も六ケ敷
御座候間、同方ニ暮迄見合候ニ付、いろ〳〵
酒肴出申候、暮過同方ら出し、夫ら
おし付夜半過アブト沖へ泊

一、廿日晴天、極朝アブト出し、五ツ半時頃
ハシリト申所へ参り、錠入風ヲ見合す、
此所少キ小湊アリ、此方へしはらくかゝり、
夫より水嶋迄参り、此所へ泊ル

一、廿一日天気、早朝備前汐トフシ与申
所へ参ル、同方ニ而認メ等いたし、夫ら
おし付出サキト申所へかゝり、暫く
同所ニ而潮合見合候得とも、一向
風無之候ニ付、八ツ半時頃出サキ出し
候へとも風無之、小豆嶋山離れ
候与相見へ、少々風宜敷、暮過大タ
ブ湊へ入泊リ

一、廿二日曇天、早朝大タブ出し候へ共
風無之、少々ツ、マギリ、おし付漸々
夕方明石湊之内入、夫より髪結風呂江
入、船へ帰り候処、追々風烈敷相成、少々雨
借ス、同夜湊入神酒として金壱朱

資料紹介 ―「道中日記覚帳」

宮島歴史民俗資料館学芸員
高橋修三

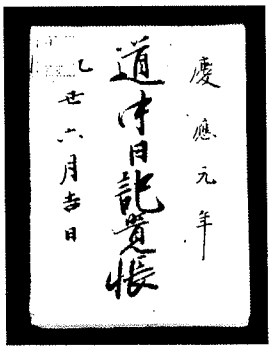
ここに紹介する「道中日記覚帳」(一九七四年、宮島町瀧町　吉村喜宏氏寄託)は、慶応元年(一八六五)、「御役所」より「御翠簾」の「請取方」を仰せ付けられ、上洛した小川益太郎他一行の道中の様子を、棚守手代小川益太郎が書き留めたものである。

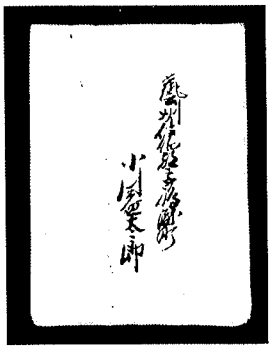
袋綴小型横帳(綴125㎜×横175㎜)。墨付18丁(本文の他に「買物覚」を含む。そのうち一丁分欠落)。表紙に「慶応元年　乙丑　六月吉日　道中日記覚帳」、裏表紙に「藝州佐伯郡宮嶋瀧町　小川益太郎」と記されている。所々に虫損がみられる。

六月十七日夜九ツ半時頃、宮島千畳閣下の大雁木を出立した小川益太郎、佐伯喜太夫、青木豊助、住吉丸大坂屋清吉、源次郎、増吉、孫次郎の一行は海路、音戸・竹原・尾道・阿伏兎・水島・大多府・明石などを経て、二十三日、大阪へ到着。その後、「御翠簾」を請けとり持ち帰るために、為替の受取、通行の許可、代金の支払、荷作り等の手続を、大阪・京都の「蔵屋敷」・「公儀目附」・「翠簾屋」・「勘定所」などで行ない、二十九日、船積みを終える。七月朔日、大阪筑前橋を立って帰途につき、神戸・明石・牛窓・下津井・阿伏兎・「よど嶋」などを経て、六日朝五ツ時頃、音戸を通過し宮島に向かっている。

内容について充分に検討を遂げていないため、今後の調査に拠るべき点は多いが、宮島の住民の体験に基づいた、この時代の航法・航路や停泊地の実態、代金支払や請取の方法、更には上方と宮島との係りの有様など、細かい記述はみられないものの、興味深い事柄を数多くうかがうことのできる貴重な資料と考えられる。

なお、紹介にあたっては、地名等を除いて常用漢字とし、読点・並列点を適宜付したほかは原文の通りとした。また、虫損の個所には□を、不明な個所には?を付した。





慶應元年
道中日記覚帳
乙丑六月吉日

②謡本（小鼓の付が書き込まれているものも多い。）

イ、明治43年喜多六平太一番綴謡本（増訂三版）四冊。「敦盛・玉鬘・山姥・草紙洗小町」。

ロ、明治43年喜多六平太五番綴謡本（増訂三版）三五冊。木箱入り。内1～30・外1～10・追加（三番）・曲舞全42冊のうち、9・10・14・17・20・22・外10を欠く。

ハ、縮刷十番綴喜多流謡本（大正5・訂正六版）一冊。「玉井・金札・岩船・皇帝・道明寺・田村・八島・箙・兼平・実盛」。

ニ、大正版喜多流謡本三冊。「俊成忠度」（大正12）・「竹生島・大江山」（大正15）。

ホ、昭和改訂版類題喜多流独吟集成（昭和7）一冊。

ヘ、昭和版宝生流一番綴謡本（昭和7）六冊。「高砂・羽衣・敦盛・小鍛冶・小督・鉄輪」。

ト、大正改版観世宗家正本六冊。「海士」（大正10）・「紅葉狩・猩々・橋弁慶・吉野天人・土蜘蛛」（昭和4）。

チ、観世流改訂謡本「景清」（大正7）一冊。

リ、金剛流謡本「富士山」（明治31）一冊。金春流後場の詞も書き入れてある。

ヌ、「新曲大石」謡本（大正13）一冊。

ル、観世流仕舞入門形付（昭和33）一冊。

③手付

イ、仮綴手付三種。「源氏供養・井筒・熊坂」。

ロ、「翁」手付。

ハ、「翁」脇鼓手付。

ニ、布表紙雑記帳利用小鼓手付。

ホ、小型黒手帳利用「式三番・置鼓」等手付。

ヘ、森田流唱歌集書込み増補手付。

ト、雑記帳一部利用手付。

チ、サイン帳利用手付。

リ、五段ノ舞行途図。

ヌ、下掛各流及び宝生流五段ノ舞教授用手付。

ル、破掛り羯鼓三段教授用手付。

ヲ、大小鼓「一声・クリ」等粒付。

ワ、「祈リ」大小太鼓手付。

カ、鼓ノ手付抜寄セ書。「籠祇王・飛鳥川・砧・関原与一・葛城天狗・龍虎・求塚・落葉・大蛇」の大鼓手付。

ヨ、大学ノート利用メモ風手付。

タ、拍子箋利用手付多種。

④その他

イ、小鼓調緒　三箱。他に短い調緒一本。

ロ、『今様能楽踊歌』一冊。卍繋ぎ藤色表紙。袋綴（199×144）。

楊貴妃留メ、富士太鼓・邯鄲楽掛リ、笏拍子掛リ、火宅留、六根頭、海士中入、定家ノ掛リ、狂女ノ序、遊女ノ序、木賊ノ序、六道、下略頭、露ノ紐解キ、幸流袖神楽、観世流太鼓一調、卒都婆小町橋掛での休足、楊貴妃ノ序、松風本ノ一拍子、木賊ノ序ノ名、邯鄲次第ノ内休息、芦刈・江口・三輪打切、金剛返、定家六道、海士中入ノ手、呂律、序破急、番組仕様、西行桜序、羽衣天人序、誓願寺菩薩序、舞ノ笛、経政音取、道成寺。

記事の重複が多いがそのまま挙げた。傍線を付した項目は、目録で「○印ノ分大鼓小鼓太コ等手付有」という○印が打たれているもの。「甲ノ掛リ」と「清経出羽」の項では「小笛流」（森田流）の唱歌と並べて「由羅流笛」の唱歌も載せている。

45、脇仕舞付并能心得事　一冊

袋綴小型写本（177×126）。浅葱色布表紙。墨付84丁。表紙には「百番脇仕舞付并能心得事」との刷題簽が貼られているが、中身は写本。水を被ったらしく、罫線の赤インクがにじんでいる。目録は上下二段に分かれ、上段には「此上段ハ喜多七大夫先生ノ記シ置キタルヲ写ス」、下段は「是ヨリハ十川氏ヨリ借リ同氏ノ手付又ハ高安流モあり　聞書モ少シアル也」と注記。装束付を記したり、舞台に立つ位置を図示した曲もある。本文末尾に「羅生門」に関する長大な記事（目録には無し）を載せる。

〔その他〕

46、仮綴「双紙洗小町」謡本　一冊

仮綴横型写本（139×200）。墨付11丁。第7丁以下は節付無し。

47、仮綴「桜井」謡本　一冊

仮綴写本（240×172）。墨付9丁。片面7行。朱入り。

48、仮綴「源氏供養」謡本　一冊

仮綴（230×161）。中身は版本。墨付9丁。片面7行。書入れ無し。

49、謡曲指南抄　一冊

袋綴刊本（221×160）。薄茶色表紙。題簽「謡曲指南抄　全」。墨付40丁。片面10行。元禄9年川勝五郎左衛門板、明治31年4月刊。発行者檜常之助。

50、改正観世流謡字引　一冊

袋綴小型横本（72×160）。薄茶色表紙。明治26年8月刊。林喜右衛門著。檜常之助・町田恒吉発行。

別箱の分

①免状

イ、大田一夫宛「頭取・置鼓・脇能」免状。明治41年9月、山崎一道（幸流芸事取締）より。

ロ、吉村準二宛「頭取・置鼓・脇能」免状。昭和13年2月、幸悟朗より。

ハ、泉盛夫宛「入門」免状。昭和27年6月、幸祥光より。

ニ、泉盛夫宛「頭取」免状。昭和37年6月、幸祥光より。

〔金春流太鼓付〕

40、ボール紙表紙太鼓手付　一冊

仮綴横型写本(145×224)。ボール紙表紙。墨付10丁。朱入り。明治39年1月写。

序ノ舞、羽衣、杜若、出端、イロヱ掛、神楽、楽、五段ノ舞、早笛、イノリ。

41、「乱」粒付　一冊

仮綴写本(120×168)。墨付5丁。朱入り。段ごとの特殊な手の粒付。朱で「当リ大チガイナリ」などの注記も。後半に笛唱歌と謡部分の地拍子を記す。

42、喜多流舞付付載太鼓頭付　一冊

仮綴横型写本(125×182)。ボール紙表紙。墨付22丁。朱入り。五段舞型付(行途図)、神楽型付、太鼓手組粒付、〈序ノ舞・神楽・楽・五段ノ舞・出端・早笛・舞働・イノリ・来序・真ノ来序・下リ端〉の手配り、〈羯鼓・カケリ・イロヱ・祈リ(葵上・黒塚)・烏頭カケリ・通小町カケリ・阿漕カケリ〉の型付、太鼓締様、舞台の作法。

43、太鼓手付記載紙片　五枚

142×460の横長の紙片5枚。朱入り。手組粒付(2枚)。〈出端・中ノ舞・神舞・下リ端・来序・序ノ舞・破ノ舞・出端一段・舞働・早笛〉の手配り。

〔型付・習事〕

44、「喜多流仕舞付口伝書其他習事心得ノ事」　一冊

袋綴横型写本(143×195)。白色ボール紙表紙。墨付56丁。朱は無し。「延年小鼓打様」の紙片一枚挿込み。表紙と最終丁表に大田一夫の署名。第三丁の目録末に「右壱百弐拾四科目　右ハ厳島町喜多流仕手方皆伝三浦兵馬氏蔵書ヲ子息兵大夫氏ヨリ大正六年十二月許シヲ得テ写之　但シ天保年間ノモノ」との識語あり。

湯谷(三段舞・膝行)、安宅三段舞、井筒(三足半・翔リ)、柏崎(笹拍子・舞)、海士(真ノ一拍子・二段返・懐中ノ留)、三輪岩戸舞、松風(半返・甲留・見留・居留)、野守留メ・三井寺月見、芭蕉・山姥二重居り、船弁慶の習事、烏頭組落、甲ノ掛リ、老松紅梅殿、夕顔合掌留、江口(船ノ内習・平調返)、融(笏舞・知ラセ)、楊貴妃留メ、経政・清経出羽、紅葉狩早笛、邯鄲翔リ、氷室・是界・殺生石・小鍛冶・芭蕉白装束、花筐大返、朝長懺法、檜垣乱拍子、高砂切留メ、順逆ノ廻リ、葛城神楽、卒都婆小町休足、舞不乗、中入ニ面ヲキラザル能、角田川念仏内ノ事、力道細道、桜川・籠太鼓・山姥舞、幕内習ノ事、踏留ル一声不踏留一声、道明寺笏拍子、五ヶ条詠口伝、来迎拍子、二字ツメ、一調謡様、関寺小町舞、延年之舞、半返、大返、船弁慶(二段目仕舞時・後ノ習ノ時)、笹拍子幸流習星付、同流真一拍子、安宅延年掛、三足半、大返、岩戸舞留メ、本留メ、半打上、二重(芭蕉一声)、山姥小玉頭、来迎拍子、平調返、定家袖神楽ノ後、笏ノ舞、

33、「大鼓替手打様口伝之事」　一冊

袋綴写本（153×118）。墨付25丁。料紙は片面8行の青色罫線が刷られた薄様。朱入り。第一丁表に「明治卅二年正月　渡辺先生ヨリ授けたり」とあり。各曲の詞章の一部を抜書きし、横に替手の粒付を記す。

34、喜多流神舞手付記載紙片　二枚

薄手の袋を破いたらしい265×430ほどの白色洋紙二枚に、鉛筆で、喜多流神舞五段の手配りと特殊な手の粒付を記したもの。二枚目に「末筆乍ら有り合せの紙で失礼しました　先ハ呉々も御自愛の程を　草々」とのメモあり。

〔大小鼓付〕

35、半紙本仮綴大小手付七種　一綴

謡本七曲分の中身だけを一つにまとめて仮綴したもの。写本・刊本混合。

①鱗形　写本・6丁・片面7行。朱で大鼓手付と頭注。「明治十九年三月写之」。

②愛宕空也　写本・10丁・片面7行。朱で大鼓手付。

③満仲　写本・15丁・片面7行。朱（二種）で大鼓手付と注記。「明治十八年五月上　写之」。

④大蛇　刊本（わんや発行）・8丁・片面7行。金剛流相手の場合の付。朱で小鼓手付と頭注、墨で大鼓手付。

⑤飛鳥川　刊本（わんや発行）・7丁・片面7行。朱で小鼓手付、墨で大鼓手付。

⑥関原与市　刊本（わんや発行）・5丁・片面7行。朱で小鼓手付と頭注、墨で大鼓手付。

⑦求塚　写本・14丁。片面7行。朱で大鼓手付。明治23年10月19日の演能のためにとりあえず記した付であるとの識語あり。

36、宝生流謡本「綾鼓」大小手付　一冊分

表紙・綴糸無し。墨付12丁（刊本の中身）。片面6行。朱で小鼓手付・墨で大鼓手付。

37、邯鄲〈楽〉大小手付　一冊

仮綴横型写本（122×165）。墨付6丁。邯鄲の楽の笛唱歌を八割譜にし、朱で小鼓、墨で大鼓の手配りを記す。唱歌のうち「能の時、空降り空段」の分も朱で書かれている。

38、ボール紙表紙八割手付　一冊

仮綴横型写本（143×204）。薄茶色ボール紙表紙。墨付13丁。本来の料紙八枚は薄様、追加分の五枚は普通紙。五段神楽・乱・獅子・盤渉楽の笛唱歌を八割譜にし、朱で大小鼓（五段神楽は大鼓のみ）の手付を記す。獅子の「乱序」部分には太鼓の頭付も。

39、大小鼓手付入り「喜多流謡曲大成」　四冊

「喜多流謡曲大成天長地久（喜多六平太著・明治39～40年）に、朱・赤ペン・青ペン等で、大小鼓の手付や流儀による演出の相違、演能の際の注意事項等を記した手控え本。天の巻裏表紙見返に「広島県佐伯郡厳島町三百六番地　大田一夫」の署名。

越の時の相違点についても触れる。

23、わんや発行「幸流小鼓手付本」 一冊

大正3年11月30日刊の手付。三須平司著、幸悟郎校閲。椀屋謡曲書肆発行。半紙版袋綴。墨付34丁。

24、四拍子併記改訂小鼓手附大成（五～八） 四冊

大正11～12年刊の活字本。岩崎菊翁編、吉田善之助発行。袋綴横本。四拍子の流儀は、森田・幸・葛野・金春。

25、観世流謡本「大瓶猩々」 一冊

明治43～44年発行の別製本（183×130）。墨付4丁。片面7行。鉛筆で薄く小鼓の手付が書かれている。

〔葛野流大鼓付〕

26、巻子本「抜書大鼓手付」 二巻

未装巻子本（紙高180㎜の楮紙）。朱入り。一巻目の右端に「抜書大鼓手付」と記し、その下に朱で「朱ハカンゼ」と注記。緑色の書込み（松尾）は色褪せてよく読めない。遠い曲が多いが「此一セイ二タンメ打ヲ打上テモヨシ　去ナガラトカクウヒツ（ママ）マル也　其上節合もクツシテヲク方がヨシ」（空蟬）の如き、実演に基くと思われる記事が目に付く。〔写真⑤〕

一　藤、陀羅尼落葉、豊干、松尾、胡蝶。

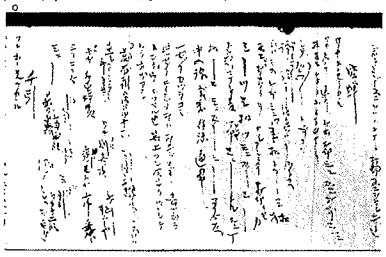
二　忠信、伏見、浦島、空蟬、千引、草薙。

27、式三番手付 一冊

仮綴横形写本（122×164）。墨付4丁。朱入り。表紙にあたる第一紙に「頭取　一式」と書かれているが、実際は大鼓の付で、小鼓の手はところどころ朱で記されるのみ。揉出シ・揉ノ段・鈴ノ段の手付の他、舞台上の作法にも触れる。

28、「頼政・盛久・三輪」手付 一冊

仮綴写本（200×138）。墨付23丁。片面5行。朱入り。頼政・盛久・三輪の詞章（節付無し）の横に朱で大鼓の手配りを記す。



⑤

29、半紙版仮綴「乱」手付 一冊

仮綴写本（246×170）。墨付5丁。待謡からトメまで「猩々」の詞章（節付無し・片面5行）を記した横に、朱で大鼓の手配りを付し、末2丁に墨で「乱」の手配りを記す。朱の注記もあり。

30、半紙版仮綴「俊成忠度」手付 一冊

仮綴写本（250×172）。墨付7丁。朱入り。表紙にあたる第一紙に「大鼓手付　俊成忠度　明治廿三年一月写之　大田一夫」の署名あり。詞章（片面7行・節付無し）の横に、墨または朱で大鼓の手配りを記す。

31、宝生流謡本「姨捨」手付 一冊

わんや発行の謡本の中身を仮綴にしたもの。半紙版。墨付12丁。片面6行。詞章の横に手配りを、上部空欄には注意事項や特殊な手の粒付を、朱で記す。

32、宝生流謡本「関寺小町」手付 一冊

30と同じ。墨付15丁。こちらは手配りのみで、頭注の類無し。

袋綴横形版本（135×207）。料紙は薄様。水色表紙。墨付56・44丁。朱入り。元禄八年五月刊の山本長兵衛版携帯懐中謡本（百番揃）に朱で小鼓の手付を書込む形式。相手流儀による違いにも触れる。

15、宝暦五年刊携帯用謡本書入れ手付　一冊

袋綴横形版本（135×207）。料紙は薄様。水色表紙。墨付67丁。朱入り。宝暦五年南呂（八月）吉辰刊の山本長兵衛版携帯懐中謡本（五十番綴）に朱で小鼓の手付を書込む形式。相手流儀による違いにも触れる。紙片の挿み込みあり、「吉村準次ニ譲ル鼓ニ関スル秘伝書　笛太鼓大鼓小鼓書類　小鼓幸流家元ノ免状　大鼓十三歳ノ神舞　祖父片山房太郎ノ紀年ノ手付（俊成忠度）其他色々自作の笛　広島市鶴羽根神社の舞台にて数度能楽をつとめる」と記す。

16、享和版「下懸囃謡大成」書入れ手付　一冊

袋綴横形版本（128×190）。墨付214丁。表紙剝落。裏表紙見返に「文化辛未八年　冬十有二月上旬　守田氏」と記す。謡詞章の横に朱で小鼓の手付を書込む形式。

17、渋谷信徳署名版本書入れ手付　一冊

袋綴横形版本（126×190）。墨付209丁。藍色表紙がほぼ剝落。16と同様「下懸囃謡大成」の謡詞章の横に朱で小鼓の手付を書込んだもの。16に比べると序文・目録・末尾の付録一丁分が不足し（目録は手書きで補う）、本文の謡詞章も一部脱落したのか、手書き部分が数丁ある。最終丁の表と裏に渋谷信徳と署名。

18、翁頭取手付　一枚

140×460の横長の紙片一枚に、式三番の座付から翁舞の前までの習事や付を記したもの。朱入り。

19、薄茶色表紙横本粒付　一冊

仮綴横形写本（152×236）。薄茶色ボール紙表紙。墨付24丁。表紙中央に内容目録を貼り、別に直書きで「厳島町　吉村準次蔵書」と署名。裏表紙見返に「昭和二十二年九月□（虫損）日　大田一夫　当七十歳　大阪府豊中市ニテ是ヲ記入相伝ス」の識語と「広島県佐伯郡厳島町　吉村準次蔵書」の署名あり。

森田流唱歌の八割譜に幸流小鼓の粒付を記す形式。唱歌のみ、手配りのみの部分もあり。相手流儀による違いにも触れる。

猩々乱、獅子、盤渉楽、一噌盤渉楽、五段神楽、神楽、邯鄲楽ノ掛り、富士太鼓の楽、船弁慶白浪。

20、仮綴一調手付　一冊

半紙版仮綴写本（244×166）。墨付5丁。詞章（節付無し）を墨で、手付を朱で記す形式。鉛筆の書入れもあり。

蟬丸、笠之段、女郎花、松虫。

21、「乱」八割手付　一冊

仮綴写本（228×160）。白色ボール紙表紙。墨付12丁。片面11行の青色罫線が刷られた紙に横線を引いて八割譜を作ってある。

小鼓の手配り（第1丁）、笛の唱歌と小鼓の粒付・太鼓の手配り（第2～4丁）、笛の唱歌と大小鼓の粒付（第5～9丁）、笛の唱歌と太鼓の粒付（第10～12丁）。

22、「一声」粒付紙片　一枚

青焼きの八割譜に本越一声の粒付をペンで書き記したもの。片

府中街三丁目　沢井政秀」の署名あり。鉛筆で曲名を書いた半紙も挿み込まれている。墨で謡の詞章を記し、朱で小鼓の粒付を記す形式。一調35番、独打（独鼓のことらしい）3番。

三輪、三井寺、半蔀、高野物狂、同クセ、雲雀山、小督、道明寺、善知鳥、八島、小袖曽我、夜討曽我、三井寺、蟬丸、雲林院、笠之段、江口、二人静、鳥追舟、班女、籠太鼓、女郎花、花筐、同奥、放下僧、松虫、芭蕉、土車、歌占、東岸居士、桜川、百万、柏崎、蟻通切、同クセ、田村独打、八島独打、蟬丸独打。

10、式三番・脇能打様　一冊

仮綴写本（242×178）。白色ボール紙表紙。墨付16丁。朱入り。鉛筆による書込みもあり。表紙に「大田」と署名。

式三番打様（頭取打様・脇鼓打様）、脇能置鼓、五段次第、五段之一セイ。

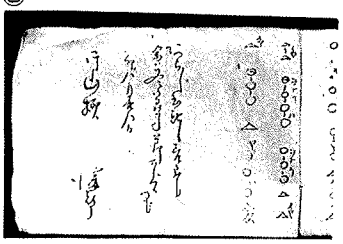
11、仮綴横本「幸流小鼓頭付」　一冊

仮綴写本（151×222）。墨付4丁。表紙にあたる第一丁表右下に「清次郎（？）」の署名。中央の「幸流小鼓頭付　片山御氏」は後人による別筆。奥書「あら〳〵書起差上申候／余ハ又々御尋節可申上候　已上／卯八月廿八日／片山様　清次郎（？）」。内容は基本の手組の粒付。本越一セイ・クセドメ等のまとまりのある手組を多少含む。〔写真③〕

12、大福帳綴小鼓一調・独鼓粒付　一冊

大福帳綴小型横本（86×191）。写本。墨付41丁。朱入り。表紙にあたる部分に「覚　小鼓独打一調」と墨書。初めの12丁に独鼓の手配りを記す。紙が新しく筆跡も以下と違い、後補らしい。後半29丁が一調の粒付で、朱でかなり詳しい粒付が記されている。但し末尾3丁は初めの12丁と同じ筆跡で、ここも後補らしい。後半の一調粒付部分の収録曲のみ挙げる。

③



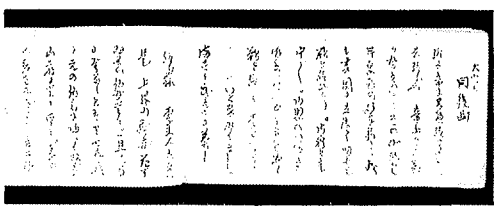
道明寺、蟬丸、女郎花、放下僧、三井寺、芭蕉、班女、二人静、籠太鼓、土車、江口、雲林院、花筐（前・後クセ）、鳥追舟、笠之段、蟻通、松虫、小督、三井寺鐘之段、善知鳥。〔写真④〕

13、豆本舞の手付　一冊

袋綴小型横本（74×120）。写本。墨付22丁。表紙と第一丁は斜めに半分破損。表紙右下に「兵馬本」と記す。特殊な舞事について森田流の唱歌を墨で記した横に朱で小鼓の粒を付す形式。

弱法師舞入、延年ノ舞、笏拍子掛、シホリ掛、紅梅殿、乱、盤渉楽、盤渉序ノ舞、獅子等。末尾に一噌流の唱歌（楽・神楽・盤渉楽）を併記。

④



14、元禄八年刊携帯用謡本書入れ手付　二冊

早笛、早舞、渡リ拍子、楽（替手・三段楽・特殊な掛リ等も）、〈楽〉を吹く曲の習事（難波・白髭・大社・源大夫・鵜祭・寝覚・東方朔・月宮殿・道明寺・邯鄲・唐船・枕慈童・三笑・一角仙人・橘・江島・天鼓・富士太鼓・梅枝）、神楽（替手・特殊な手も）、五段神楽、〈神楽〉を吹く曲の習事（龍田・三輪・巻絹・絵馬・室君・貴船）。

5、紙箱入り小型横本頭付　　一冊

袋綴版本（84×130）。金茶色表紙。厚紙箱入り。墨付187丁。曲名の上に朱で丸印を付す。表紙見返に「広島県佐伯郡厳島町　大田一夫所有（印）」、本文182丁裏に「計　森田流頭付弐百七番　紙数百八十二枚　大田一夫所有」と書込みあり。

6、厚紙表紙森田流笛口伝書　　一冊

袋綴写本（192×134）。白色ボール紙表紙。墨付65丁。朱無し。表紙に「大田」と署名。唱歌が中心だが、時に習事的な記事も混ざる。宝暦十二年八月二十九日、観世宅での「自然居士」の記事あり。

座付、名ノリ笛、アシライ、双調音取、出端、一声、真ノクリ、ユリ、働（山姥・蟻通・阿漕の働も）、中入リクリ上ゲ、脇能トメ、切ノ能祝言ノ止メ、カケリ、弓流シ、橋弁慶・山姥のカケリ、夜討曽我切組ミ、善知鳥カケリ、田村カケリ、イロヱ、楊貴妃イロヱカヽリ、角田川カケリ、三井寺・竹生島の上羽、トメ高音、津島、葛音取、下高音、本ノ物着、草物着、吹ヲクリ、短尺ノ段、音取各種、翔働、狂言アシライ、序ノ舞・ユル序、序ノ吹出シ三種、狂言掛りの序、二人静の序、西行桜のカヽリ、序ノ舞ヲロシ、野宮破ノ舞、夕顔序ノ舞、中ノ舞、松風カヽリ、松風の破ノ舞、自然居士、猩々、柏崎、湯谷（膝行三段）、真ノ序、男舞、下リ端、羯鼓、神舞、天女舞、早舞、早笛、舞働、大ベシ、楽、神楽、五段神楽、金剛流紅葉狩舞、芦刈カケリカヽリ、早舞コマタゲ（クマタギ？）・モジリ、葛城、流八ツ頭、二段返、各曲の習の譜・替手、真ノ音取。

7、仮綴横本「諸舞之掛リ」　　一冊

仮綴写本（147×227）。墨付4丁。表紙にあたる第一丁表に「大田」と署名。二丁目表までは項目ごとに朱で丸印を付す。

草ノ神舞、早笛手掛リ、早舞、邯鄲、富士太鼓、田村・八島カケリ、夜討曽我、橋弁慶、烏頭、通小町、葵上、大臣次第、女次第、高音発ル、上端高音、祈、祝言、梓、門守、来序、本ノ物着、狂言アシライ。

8、仮綴小型横本「乱・獅子」唱歌付　　一冊

仮綴写本。墨付6丁。料紙は薄様。虫損多。朱無し。第一丁は乱の大鼓粒付（破損の為、一部読めず）、第二丁以降は乱と獅子の唱歌（虫損の為、一部読めず）。

〔幸流小鼓付〕

9、小鼓一調粒付　　一冊

袋綴写本（242×162）。白色ボール紙表紙。墨付22丁。表紙に墨で「大田」と署名。最終丁裏には鉛筆による書込みと「台北城内

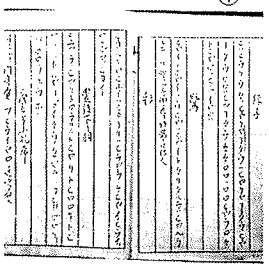
〔森田流笛付〕

1、茶色表紙笛唱歌付　　**二冊**

袋綴写本（227×160）。茶色表紙。片面9行の罫が刷られた紙。胡粉による訂正、朱の書込み、付箋あり。

一、表紙見返に「勝谷氏付物」、裏表紙見返に「勝谷勘助　文化十弐年」と記す。墨付50丁。

序之舞、神舞、男舞、中之舞、天女舞、舞働、羯鼓、下リ端、大ベシ、早舞、早笛、真之序、楽、神楽、式三番、盤渉楽、五段神楽、盤渉序舞、乱、道成寺、本ノ音取、礼脇、大臣ノ次第、真ノ一声、次第（女・僧・男・山伏）、アシライ笛（出端・名乗も）、祈、祝言、梓、翔、彩、門守、来序、働、本ノ物着、鬘之音取、真之音取、シャギリ、筑紫笛、狂言アシライ各種（腹鼓・獅子・鷺・豊後下リ端等も含む）、高砂のアシライ、熊野短冊之段、楽阿弥のアシライ、鍋八撥のアシライ、釣狐のアシライ、能各曲の口伝ある吹き所。〔写真①〕



①

二、裏表紙見返に「勝谷勘右衛門光秋（花押）付物也」と記す。墨付52丁。

能各曲の口伝ある吹き所、草ノ神舞掛リ、羯鼓の直リ所（段替も）、早舞（初段・三段・モジリ・クマタギ）の唱歌、早笛手掛リ、早舞（地ヨリ盤渉ニテ吹くこと・流シのこと）、舞働、替の序、神楽（真ノ掛リ・十ユリ・七ユリ・神楽返し）、盤渉楽・邯鄲ソラ段、真ノ序、半開口、真鬘之音取、小手之音取、双調之音取、一越之音取、修羅音取、草之音取、山之端ノ一声、清経之音取、平調之音取、盤渉之音取、恋之音取、三重音取、乱曲之音取、幕掛本音取、序ノ舞に関する習事（休足・替・吹出等）、各曲の習事・替ノ舞等、脇能音取の時の置鼓（幸流）、津島唱歌（一部指付も）、一管に吹くもの、各曲習事・雑説、笏ノ舞（融）の型付・吹配リ、「寛政五年丑ノ十一月二日奥於御舞台御慰御能」での湯谷勝行の記録、尺ノ舞（佐保山）、真ノ笏ノ舞・草ノ曲水ノ舞（融）、熊野型付・吹配リ、盤渉早舞唱歌、津島唱歌（利三郎伝。一部指付も）、ユル序、神楽・男舞の唱歌（部分）。〔写真②〕

2、紫色表紙「翁・脇能一式」　　**一冊**

仮綴写本（146×228）。紫色の布を張ったボール紙表紙。墨付7丁。朱無し。

式三番唱歌、高砂頭付（音取・出端・特殊な手などは唱歌も合せて記す）。

②

3、真ノ序唱歌付　　**一冊**

仮綴写本（125×170）。小さな手控え。五枚の紙を綴じ、二～四枚目に「真ノ序ノ舞」の唱歌を、五枚目に「五段神楽」初段の唱歌を記す。朱無し。

4、半紙版仮綴唱歌付　　**一冊**

仮綴写本（245×165）。墨付45丁。朱無し。

アシライ、翔、一声、出端、序ノ舞、中ノ舞、男舞、羯鼓、

を聞かせてくださった泉盛夫氏と合せて、厚く御礼申し上げる。

〈凡　例〉

一、泉氏からの寄託文書のうち大田一夫関係の資料を、内容によって「森田流笛付」「幸流小鼓付」「葛野流大鼓付」「大小鼓付」「金春流太鼓付」「型付・習事」「その他」に分類し、適宜解題を付した。

一、吉村準一郎が泉氏に書き与えた手付や泉氏自身の手控えは「別箱の分」として一括し、「免状」「謡本」「手付」「その他」に分類した。

一、例えば小鼓の手付でも、笛の唱歌を書いた上でその横に粒付が記されていたり、太鼓の頭付が書き込まれていたりする事が多い。その手付全体がどの楽器の演奏の為に記されているか、大まかに判断した上での分類で、決定的な物ではない。

一、文書の料紙について、特に触れていない場合は、所謂「普通紙」と言われている和紙である。

一、文書の大きさは、縦×横の長さをミリ単位で示してある。

(注)これらの文書が保管されている木製の箱の蓋（裏側）には、次の様に記されている。

昭和二十七年十一月記入スル（当年七十五才）
大田一夫ハ祖父片山房太郎ニ大鼓ヲ習ヒ十参才／ニシテ厳島神社ノ神能（毎年三月十六日十七日十八日）ニテ／俊成忠度ヲ勤メタルヲ初舞台トシテ夫レヨリ毎日稽／古ヲナシ祖父没後ハ渡辺竹三郎(祖父ノ師匠ノ子息)／ニ就キ日々稽古ヲナセリ其間謡ノ大家粟谷／新三郎先生ヲ廣島市ヨリ厳島ニ移住サセテ／謡ヲ習ヒ又タ仕舞モ若干習得セリ時ハ／明治三十七年十一月ナリ初夏ニナリ日清戦始マル／笛ハ野上貞勝氏ニ習ヒ（森田流）廣島ノ鶴羽根神社ノ能舞ニ於テ五六番笛方トシテ能楽ヲ相勤メル／太鼓ハ山崎利三郎氏（金春流）ヲ習フ／日露戦役済ミテ満期退営歸郷シテ／直チニ京都ニ上リ小鼓（幸流）ヲ／林吉兵衛氏ニ就キ習得セリ上京シテ／三日目ニ金剛勤之助氏ノ舞台ニ大鼓ヲ／勤メル引續キ片山九郎三郎氏ノ舞台ニテ／大鼓ヲ勤メル夫ヨリ毎月両舞台ニテ／一番宛出勤セリ其後郷里ニ歸リ囃子方／師匠トシテ台北市ニ往復スル時ハ台北市ニ彰／票(今ノ寶クジ)前年迄デアリシ時滞在大水ニ／合フ引揚ケタル翌年総督府健築セラル／其後ハ内地松山市ヲ初メトシテ内地ノ／各地ヲ師匠トシテ出張セリ

宮島町立宮島歴史民俗資料館
泉盛夫氏寄託能楽関係文書目録

法政大学能楽研究所兼任所員
山中玲子

はじめに

本稿は、昭和16年から60年まで宮島の神能に於て小鼓方を勤めて来られた泉盛夫氏（広島県佐伯郡宮島町上西連に御在住）から、宮島町立宮島歴史民俗資料館に寄託された、能楽関係文書の目録である。

泉氏は謡と幸流小鼓を吉村準一郎（準二）に師事した。ここに紹介する文書の大部分は、その吉村準一郎の師匠であり養父でもある大田一夫が書き写した付を、大田→吉村→泉氏と伝えてきたものである。他に、吉村準一郎が泉氏に書き与えた手付や泉氏自身の手控えも保存されているが、それは別扱いにしてある（凡例参照）。

いずれにせよ時代的には新しく、古い物でも江戸後期～末期の内容と思われるが、他にあまり資料の無い狂言「鷺」のアシライ笛や、寛政五年の「熊野勝行」の記録、天保年間の「由羅流笛」唱歌など、有益な資料も多い（昭和62年3月に法政大学能楽研究所で行なった狂言「鷺」の復曲でも、この文書に含まれていた「鷺」の譜を参考にさせていただいている）。

手付類の流儀については、内容をすべて吟味した訳ではないが、大田一夫は葛野流大鼓を祖父の片山房太郎に、幸流小鼓を京都の林吉兵衛に、森田流笛を野上貞勝に、金春流太鼓を山崎利三郎に師事したので、森田・幸・葛野・金春の四流のものと考えて良いと思う（注）。

なお、目録作成にあたり、昭和63年7月、資料館学芸員の高橋修三氏、米子工業高等専門学校助教授の永井猛氏と共に泉氏の御宅にお邪魔し、宮島の能についてもお話を伺った。「明治時代、玄人は浅野家からの扶持を受けていたので、宮島の人に無料で芸を教えて神能を演じさせていた」「道具の管理やお金の出し入れは神社の役目、役者との折衝は執事の出雲氏の役目だった」「役者たちは能の前になると、『道具を質入れしてしまった』と言って神社からお金を貰った」「正月二日の謡初・松噺子の時に能組を決めた」「神能は一日五番ずつ3日間行ない、昔はシテは喜多流ばかりだったが、泉氏の時代には、一日目は喜多、二日目は観世、三日目は喜多と観世、という形になった」「だんだん役者が減ってしまったが、昔、人が多かった頃は、新人は初番に出演し、その初番は観客が鹿しかいないので『鹿能』と呼ばれた」等々、面白いお話として記憶に残っているので、断片的ながら、書き留めておく。

調査に際しては、資料館の方々に多大の御便宜をはかっていただき、特に学芸員の高橋修三氏には一方ならぬ御尽力を賜った。貴重なお話

編集後記

今回は、山中先生の能楽資料目録を掲載させていただきました。泉氏は長年、謡・小鼓をつとめられた方ですが、伝えられた資料は大鼓・小鼓・笛・太鼓にわたり、前々回・前回の吉村氏寄託の狂言を中心とした関係資料と合わせて、「神能」に係った人々の具体相を窺うことができます。調査にあたってご指導いただいた山中先生、および何かとご便宜をはかっていただいた泉氏に厚くお礼を申し上げます。

今後も関係資料の調査整理を進めると共に、これらの「もの」や、そこから汲みだされ蓄積された成果を、「ひと」との係りのなかで活用していきたいと考えています。

引き続きご協力いただきますようお願い申し上げます。

なお、日頃から資料館・町史編さん室の活動に対し、ご援助いただいた岩村喜代人氏が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

宮島の歴史と民俗 No. 6

昭和63年12月15日　印刷
昭和63年12月20日　発行

編　集　宮島町立宮島歴史民俗資料館
　　宮島町史編さん室
発　行　宮島町立宮島歴史民俗資料館
印　刷　日本写真印刷株式会社